
絶対に笑ってはいけない宇宙警備隊24時

バルタン星の人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

絶対に笑ってはいけない宇宙警備隊24時

【Nコード】

N4372U

【作者名】

バルタン星の人

【あらすじ】

この作品は「ウルトラマンシリーズ」の二次創作です。原作のイメージを大事にしたい方、猛烈なキャラ崩壊、グダグダ展開等が苦手な方は今すぐお戻りください。また、中の人ネタ、その他作品ネタも含んでおりますのでお気を付けください。

M78星雲ウルトラの星へとやって来たウルティメイトフォースゼ

ロの4人+ウルトラマンナイス。
そんな5人に課せられた地獄のゲームとは……

始めてくれ！（前書き）

初投稿です。

m 駄文だと思いますが、どうか最後までお付き合いください m
〔

始めてくれ！

某月某日

M78星雲光の国。

ウルトラマン以下ウルトラ兄弟等の故郷のこの星。

そのとある場所に、4人の戦士が集まっていた。

ゼロ「此処が俺の故郷、M78星雲ウルトラの星だ」

ミラーナイト「とても美しい星だね」

ジャンボット「まったくだ：私の知らない場所にこのような星があったとは…」

グレンファイヤー「ちょっと眩しいけどな」

彼等はウルティメイトフォースゼロのメンバーである。

別宇宙、M78星雲が存在しない宇宙にやって来たウルトラマンゼロが、そこで出会ったミラーナイト、ジャンボット、グレンファイヤーの三人と共に結成した宇宙の平和を護るチームである。

ゼロ「そして向こうに見えるデカイ建物が、この宇宙の平和を護っている宇宙警備隊の本部だ！」

ゼロが指差す先には、周囲の建造物と比べてもけた違いの高さの建物がそびえ立っていた。

ミラーナイト「すごいな！」

ジャンボット「あれだけの規模なら安全だな…」

グレンファイヤー「あそこにゼロの先輩とかがいるのか？」

ゼロ「まあな」

ゼロの紹介にそれぞれの感想が飛び出す三人。

何故彼等が来ているのか。それはゼロが三人にM78星雲に招待するよう依頼された為である。

快諾したゼロは三人に呼び掛け、無事実現したのだ。唯一ジャンボットだけは、「姫様の護衛が…」と渋っていたが、「すぐに終わる」と言われた為に了承してくれた。

ゼロ「じゃあ、次はアレを——」

ゼロが次なる建造物を紹介しようとした時だった。

？「おい！待たせたな〜！」

「「「は？」」」

彼方から聞こえてきた声に、思わず一同が振り向く。其処にはウルトラマンらしき人物が、猛スピードでこちらに向かって走っているのが見えた。

???「ふう〜到着到着。ナツ！」

ゼロ達の眼前で止まり、独特のポーズをとる戦士。

暫し、沈黙するゼロ達4人。

グレンファイヤー「……お前誰だ？」

ようやく口を開いたグレンファイヤーに、戦士が答える。

ナイス「ウルトラマンナイス!!」

ウルトラマンナイスと名乗り、再びポーズをとる。

ミラーナイト「ウルトラマン?……ということはゼロの知り合いかい?」

ゼロ「いや……こんなヤツは見たことがない……」

ミラーナイトの問いに、首を横に振るゼロ。

ナイス「仕方ないさーみんなとは違う宇宙の出身なんだから」

ジャンボット「つまり、私達の宇宙でも、ゼロの宇宙の出身でもないということか？」

ナイス「大正解!」

ジャンボットの一言にサムズアップするナイス。

ゼロ「ところで、何でナイスがこんなところに?」

率直な質問が飛び出した。

ナイス「ああ。確かメビウスっていう人が来てほしいと言われてね……」

ゼロ「メビウス？……まさか……」

メビウス、この名前にゼロが反応した直後だった。

メビウス「揃いましたね皆さん！」

「「「「え？」「」「」」

一同の背後から、いつの間にか立っていたウルトラマンメビウスが声を掛けた。

ゼロ「ウルトラマンメビウス？何故此処に……」

グレンファイヤー「何だ？仲間か？」

ゼロ「ああ」

メビウス「ゼロ以外の皆さん初めまして！僕はウルトラマンメビウス。今回のゲームの案内人です」

「「「「ゲーム？」「」「」」

一同はまだ、これから地獄が始まることに気が付いていない……

始めてくれ！（後書き）

こんな作品で大丈夫か？

大丈夫だ、問題ない。

ウルトラ爆笑作戦第一号

ゼロ「ゲームってどういうことだ？」

メビウス「説明致します！」

さっきから丁寧語のメビウス。逆に気味が悪い。

メビウス「今から貴方達5人は24時間、宇宙警備隊の隊員になってもらいます」

ゼロ「ちよつと待て。俺は既に隊員では…」

メビウス「ゲームですから、細かいことはあまり気にしないでください」

ゼロ「あ…ああ」

戸惑いながらも頷くゼロ。対する他の4人は真剣に聞いているが。

メビウス「次からが重要です！勤務中はどんなことがあっても絶対に笑ってはいけません！もし笑うと痛い罰を受けることになります」

グレンファイヤー「ハッ！笑う訳あるか！」

メビウス「そして、ゲーム中は飛行、または光線を撃つことは禁止です！」

ミラーナイト「もし破ったら？」

メビウス「か・な・り厳しい罰を受ける羽目になりますよ♪」

ナイス「何か凄い怖いんですけど…」

メビウス「簡単な説明は以上です。何か質問はありませんか？」

ジャンボット「質問だ」

メビウスの問いにジャンボットが右手を挙げた。

メビウス「何ですか？」

ジャンボット「私は姫の護衛をしなければ…」

グレンファイヤー「焼き鳥の護衛なんかいらないだろう？」

ジャンボット「焼き鳥だと…無礼者！」

グレンファイヤー「わかったわかった」

軽口を叩いて頭をかきあげるグレンファイヤー。全く反省していない。

メビウス「姫様については安心してください！」

ジャンボット「え？」

メビウス「姫様は旅行で此処に来てくれますし、そもそもこのゲームの発案者なんですよ♪」

ジャンボット「なんだと!?!」

ミラーナイト「姫様が…だと…」

メビウスの爆弾発言に驚愕する一同。

と、そんな一同の側に宇宙船みたいなバスがやってきて停車した。

ナイス「何アレ？」

メビウス「言い忘れていました。飛行禁止というわけなので、移動はこのバスに乗ってもらいます」

ゼロ「何か何処かで見たことあるぞ…」

ゼロが指摘するのも無理はなかった。

何故ならそのバスは、「アンドロメロス」に登場した宇宙船のダウジングサイズのバスだったからだ。

メビウス「さあ! このバスに乗った瞬間からゲームスタートです! 皆さん準備はOKですか？」

「「「OKだ」「」「」」

メビウス「では乗ってください!」

ゲームスタート!

現在の時間…A・M 9:00

一同はバスの真ん中にある昇降口から乗車した。

メビウス「皆さんこちらに座ってください」

メビウスが指差す座席は、ちょうど昇降口を向いており、誰が乗ってくるかはつきりとわかるようになっていた。

ミラーナイト「この配置パターンは嫌だな…」

ナイス「そうそう！」

ゼロ「みんな…座るぞ」

全員が着席したところで、メビウスが運転手に呼び掛ける。

メビウス「では運転手さん、よろしくお願いしま〜す」

運転手「チョリ〜ス！」

運転席から顔を出したのは、紛れもなくアンドロメロスだった……

一同「ギャル語？」

一同はなんとか笑いをこらえた。しかし……

アンドロメロス「マジでこのマスク超暑いんですけど〜」

と言いながらアンドロメロスは自分のマスクを外す。

ゼロ「な……アッハッハハハ！」

ゼロが笑うのも無理はない。なぜならマスクの下の顔が……宇宙警備隊隊長のはずのゾフィーだったからだ……

デデーン

『ゼロ OUT』

機械音声が鳴り響いた。

グレンファイヤー「おい、ゼロのヤツ笑ったぞ？」

ミラーナイト「一体どんな罰が……」

ナイス「さあ？」

そうこうしている内に、わらわらとまだ発車していないバスに乗り込んできたのは……

ゼロ「な！ダーククロスだと！？止めろ！放せ！」

三人のダーククロスがやってきて、二人がゼロを座席から降ろして押さえ付け、残る一人にケツを差し出すような体制になった。そして、その一人の手にはムチが……

ゼロ「ま、まさか……」

ゼロの予感は的中した。

スバン！！

ゼロ「ぐお！」

ムチを持ったダーククロスが、ゼロのケツを思い切りひっぱたいたのだ。

用が済んだダーククロス達は何事もなかったようにバスから降りていく。

傍らにはうずくまるゼロ。

「「「……」」」

一部始終を沈黙で見つめていたゼロを除く4人。
だが、ようやく口が開いた。

ナイス「コレを…24時間？」

メビウス「はい！♪」

グレンファイヤー「何でダーククロスが…」

メビウス「実は今回のゲームですが、ウルトラ戦士や怪獣はもちろん、宇宙人やベリアル帝国軍の皆様の全面協力になっています！」

ジャンボット「なん…だと…」

ゼロ「し、死ぬ…」

メビウス「さあ！出発進行です♪」

ようやくバスが動き始めたが、此処からさらなる笑いのトラップが待ち受けているのである……

ウルトラ爆笑作戦第一号 その2

グレンファイヤー「ゼロ…ケツは大丈夫か？」

ゼロ「ああ…平気だ」

席に座ったゼロだったが、まだケツに痛みが残っているらしく、尻をしきりに触っている。

ミラーナイト「これから何が待っているのだろう…」

ミラーナイトがそう呟いた時だった。

ゾフィー「ウィース。ラジオつけてもいいッスか？」

運転席からアンドロメロスことゾフィーが声を掛けた。

メビウス「どうぞどうぞ」

5人が答える前にメビウスが答えてしまった。

そしてゾフィーが、ラジオのスイッチを押す。
すると…

マグマ星人「♪ア～イア～ムエイリア～ン♪マグマ星人の暗黒黒光りラジオ始まるよ～！」

妙な歌が流れ、マグマ星人がDJのラジオが始まった。
そして…

グレンファイヤー「アハハハ！何だこりゃ」

ナイス「マグマ星人がっ！アハハハ」

ミラーナイト「プププッ」

謎な歌に耐え切れず、三人が笑ってしまった。

デデーン

『グレンファイヤー、ナイス、ミラーナイト OUT』

音声が鳴ると同時に、走行していたバスが止まり、昇降口が開いてダークロプス達が入って来た。

グレンファイヤー「おいおい、途中で止まるのかよ！」

愚痴もむなしく…

スバン！×3

グレンファイヤー「痛ッ！」

ナイス「ぎゃん！」

ミラーナイト「ぐっ…！」

三人はケツをシバかれた…

グレンファイヤー「チクショウ！24時間コレはキツいな…！」

ミラーナイト「血を吐きながら続ける悲しいマラソンだ…」

ナイス「くそゝマグマ星人め……！」

ゼロ「知り合いなのか？」

ナイス「まあね……」

尻を気にしながら、ナイスがため息と同時に呟いた。

ゾフィー「ウィース。出発進行しますでチョリース」

相変わらず若者言葉で運転手のゾフィーが言い、バスが動き始めた。

そして、走行してから暫く経ち…

ナイス「ん？誰か立ってる……」

ナイスが指差す方向にいたのは…

一同「アッハッハハハ！！！」

5人全員が笑ってしまった。何故なら外に“LA”と書かれた大きな板を掲げた、ダダの格好をした謎のおばちゃんを見てしまったからだった。

デデーン

『全員 OUT』

バスが止まり、全員にお仕置きが課せられた…

спан！×4

ゼロ「グッ！」

グレンファイヤー「アッ！」

ミラーナイト「ぐん！」

ナイス「だん！」

4人が痛みには耐えられずにうずくまる。

ジャンボット「……？私はまだか？」

笑ったのに罰が行われないジャンボット。
しかしすぐにそれは起こった。

ブンッ！

ジャンボット「な…」

ドガシャッ！！

ジャンボット「ぐわっ！！」

ジャンボットの尻に直撃したのは…巨大なハンマーだった。

あまりの威力にジャンボットは少し吹っ飛んだ。

メビウス「スミマセ〜ン言い忘れていました！ジャンボットさん“だけ”笑った場合、尻にハンマーの一撃をくらってもらいます♪」

ジャンボット「なん…だと…不幸だ…」

メビウスが微笑みながら説明するのと、ジャンボットが暫く気を失うのがほぼ同時に起こった。

グレンファイヤー「ハハハ〜不運だな」

デデーン

グレンファイヤー「あ……」

『グレンファイヤー O U T』

спан！

グレンファイヤー「ぐえ！」

ゼロ「なんてことだ…まだ到着すらしていないというのに…」

ゼロが言い終わる前に、バスがようやく運転を再開した……

ウルトラ爆笑作戦第一号 その2（後書き）

バス移動はまだ続きますW

ウルトラ爆笑作戦第一号 その3

バスが運転再開して、既に数分後……何故か笑いの刺客が現れず、静かな時間が経過していた。

グレンファイヤー「あゝなんだか逆に居づらいな…」

ナイス「…激しく同意」

ジャンボット「もう私は笑わない！絶対に笑わないぞ！」

あの痛みを思い出し、固い決意を誓うジャンボット。

グレンファイヤー「言ったな？」

ジャンボット「そうとも！」

グレンファイヤー「んじゃ期待しましょうか」

この二人が小競り合いをするのはいつものことである。
やがて、二人の揉め事が頂点に達しようとした時だった。

停留所らしき場所で、バスが止まったのだ。

その停留所にいたのは……

ゼロ「んな……！」

ゼロは驚愕の表情を浮かべた。停留所にいたのはウルトラマンタロウとウルトラマンボーイだったからだ。

ボーイ「先生：僕はもう付いて行けません！」

タロウ「…またそうやって諦めるのか？」

何やら複雑そうな二人。何故かタロウの背景に時折炎が見えるが。

ボーイ「どうせ僕なんか：“ピカット光線”しか出せないんです！」

タロウ「諦めんなよ！ウルトラ兄弟だって最初から強い訳じゃなかったんだから！」

ボーイ「さようなら！」

ボーイはそう叫ぶと、一人バスに乗って、ゼロ達の前方にある座席に座った。

一方タロウは、啞然とした状態で立ち尽くしている。そして沈黙を破るように、バスが発出した……

ゼロ「……なんだったんだ？」

ミラーナイト「わからない…だけどとても暗い雰囲気なのは確かだね」

ゼロ「……」

一同までも暗くなってきたが、その終わりは突然やって来た。

ナイス「アレ？誰か走ってる？」

「「「え?」」」」

ナイスの言葉に、思わずバス側面の外を見る。

其処には、残像が出来る勢いで、今にもバスを追い抜きそうな速度で走るタロウが見えた。

タロウ「頑張れ頑張れ出来る出来る!! やれる! もっとやれるって! やれる! 気持ちの問題だ! 其処で諦めるな! 頑張れ! ピグモンだって頑張ってるんだから!!」

タロウが指差す先には、ジープに追い回されているピグモンが決死の走りを見せていた……

一同「アハハハ!」

※全員笑いましたが最後までご覧ください。

ボーイ「運転手さん! 止めてください!」

ゾフィー「チョリース!」

ボーイの呼び掛けでバスが止まり、降りたボーイは息を切らしているタロウの下へ駆け寄った。

タロウ「ハア…ハア……世間はさあ、冷てーよな! どんなに頑張っても誰も見てくれないんだよ……でも大丈夫! きつと見てくれているヤツがいる! そう! 俺についてこい!!」

タロウが両手を広げた。

ボーイ「センセー!!」

ボーイがその熱い胸に飛び込んだ。

メビウス「いい話しですね」

メビウスが涙を流す中…

デデーン

『全員 OUT』

スパン!×4 ドガシャツ!!

ゼロ「もっと!」

グレンファイヤー「あつ!」

ミラーナイト「くっ!」

ナイス「なれ!」

ジャンボット「よおおお!!」

熱い抱擁を交わす二人を尻目に、罰が敢行された…

数分後…

ゼロ「なあ、一体何時になったら着くんだ?」

メビウス「もうすぐですよ？」

と、次の瞬間バスが急に止まった。

グレンファイヤー「おいおい！誰も笑ってないだろ？」

率直な意見に運転手のゾフィーが答える。

ゾフィー「えーと、なんだか止まれって外の三人があ……」

ジャンボット「三人？」

何があだかわからない一同を尻目に二人のウルトラ戦士が乗り込んできた。

ゼロ「アイツ等は…ウルトラマンスコットにチャック？」

一際目立つ二人の名前をゼロが言った。

ミラーナイト「知り合いかい？」

ゼロ「…まあな」

ゼロは何故此処にいるんだ？という思考になっている。

チャック「メビウス、ちょっといいか？」

メビウス「どうしたんですか？」

スコット「実はこのバスに爆弾が仕掛けられているという情報が入ったんだ！」

「」「」「爆弾!？」」「」

突拍子もない発言に、一同は思わず席を立ち上がる。

ナイス「マジで？」

ゼロ「（スコットの声…何処かで聞いたことがあるような……）それは本当か？」

スコット「ああ。一刻も早く見つけて処理しなければ……」

チャック「スコット、ココはやはり爆弾処理の彼女を…」

スコット「わかった！ベス、頼む！」

チャックの提案を受け入れ、スコットが外に向かってベス、つまりウルトラウーマンベスを呼んだ。

ベス「わかったわよ」

ゼロ「へ？」

ゼロは困惑した。

ベスと言えば女性戦士。しかし外からの声は野太い男の声であり、しかも昇降口から言い様のない圧迫感が漂う。そして、ゼロの不安は的中することとなった。

ベス「私に任せなさいよ」

入って来たのは…ウルトラウーマンベス(?)、というよりどう見てもマ○コ・デラ○クスです。本当に(r y

一同「アハハハ！」

デデーン

『全員 OUT』

スパン!×4 ドガシャツ!!

一同「わふー！」

スコット「なあベス、キミの腕なら爆弾を探せるはずだ。頼んだぞ！」

ベス「ハイハイ」

ダルそうにしながらも、ベスは爆弾探しを……と思いきや、ベスはおもむろにミラーナイトの身体をペタペタと(必要以上に)触り始めた。

ミラーナイト「な…」

見る限り、ベスの目が何かを狩るような目だった…
対するミラーナイトは困惑、スコットやチャックは我関せずといった表情だ。

ベス「あら？アンタダメね」

ミラーナイト「へ？」

ベスはそう告げると……

パシッ！

ミラーナイト「ぶっ！？」

ミラーナイトに強烈なビンタを放った……

グレンファイヤー「ダハハハ！何だこりゃ」

ナイス「プププッ」

デデーン

『グレンファイヤー ナイス OUT』

スパン！×2

グレンファイヤー「ビッグ！」

ナイス「ボンバー！」

ベス「んじゃ、次アンタね」

ゼロ「な……」

既にベスの目が獲物を見つけた猛獣さながらだった……

ゼロ「や、やめ……止めてくれええええ！」

悲鳴を上げるゼロだったが、此処で救いの神が現れた。

チャック「爆弾があつたぞ！」

「「「「おい！！」「」「」」

一斉にツツコミ。そりゃそうだ。爆弾処理の達人が見つける前に見つけてしまったのだから。

スコット「よし！ベス、処理を頼んだ！」

チャック「行くぞ！」

ツツコミを入れた5人を尻目に、チャックが外に向かって爆弾を思い切り投げた。

すかさず、それをグラニウム光線で撃つベス。

同時に、外が爆煙と共に轟音が鳴り響いた。

「「「「えええええ！？」」「」「」」

笑いを通り越して、啞然とする5人だった……

更に数分後……

メビウス「目的地に到着〜♪」

バスが止まったのは、超巨大な建物の入り口付近だった。

ナイス「デツケェ…」

ミラーナイト「すごいな…」

グレンファイヤー「あゝあ。とっとと終わらせて帰りてえな」

ジャンボット「確かに……」

ゼロ「ああ……」

だが、ココからが更に過酷な事態になることを、彼等はまだ知らない……

現在の時刻 A・M・10:00
(残り23時間)

ウルトラ爆笑作戦第一号 その3（後書き）

バス移動終了ですw

これから内部でのお話となります。

果たしてゼロ達を待ち受ける笑いの刺客とは！？

どうぞお楽しみに！

警備隊のひみつ（前書き）

中に入る前のお話です。

警備隊のひみつ

メビウス「此処が皆さんが24時間働くことになる“UGK宇宙警備隊”です」

メビウスが指差す先に、とても大きな建物がそびえ立っていた。

ゼロ「UGK？何のことだ？」

メビウス「“ウルトラガース黒光り”の略ですよ？」

一同「……」

一同はなんとか笑いをこらえた。

全員Safe

メビウス「それでは！まずこちらにご案内いたしま……」

？「何やってんだよお前は！？」

？「お前こそ！」

一同「ん？」

突然の怒鳴り声に、一同が声の方向を見る。

其処には、ウルトラマンマックスと、ウルトラマンゼノンが口喧嘩をしていた。

ゼロ「何やってるだ？アイツ等」

ジャンボット「知り合いなのか？」

ゼロ「ちよつとしか顔合わせてないけどな…」

一同が見ているにもかかわらず、マックスとゼノンの口喧嘩はヒートアップし……

マックス「お前が悪いんだよ！」

ゼノン「何だと!？」

マックス「お前がいちいちう、五月蠅いから…」

喧嘩の途中で噛むマックス。

ナイス「プププッ」

そしてナイスが笑う。

デデーン

『ナイス OUT』

спан！

ナイス「痛い痛い！」

グレンファイヤー「こんな時でも来るのかよ……ダークロプスは…」

やがて、二人の益々言い争いが激しくなり、心なしか顔が密着している。

マックス「だからお前が！」

ゼノン「やんのか？」

マックス「やってやろうじゃねえか！」

ゼノン「いいぜ！」

マックス「おし！やるか？」

ゼノン「来いや！」

そしてリアルファイト開始かと思われたその時…

チュッ

マックス& a m p;、ゼノン「あゝいやいや」

マックスとゼノンがキスを交わし、抱擁した。

そう、ダ○ヨウ倶○部のアレである。

もちろん全てを見た一同は…

一同「アッハハハ！！」

デデーン

『全員 OUT』

спан！×4 ドガシャツ！！

言い争った先ほどがウソのように肩を抱き合って去る二人を尻目に、尻を叩かれる一同だった。

・
・
・

グレンファイヤー「クッソ〜もうこりごりだぜ…」

ミラーナイト「やっぱりキツイ…」

メビウス「ハイハイイ。ちゃんと付いてきてくださいね？」

メビウスに案内された場所は、入り口だった。

正面の門の横に、いくつかの銅像が建っていた。

それは全てゾフィーの銅像だった。

ゼロ「またゾフィーか？」

しかも十字架にかけられていたり、一体だけブロンズ像だったり、頭に火がついていたり、全部やられている像だった。

メビウス「僕たちUGK宇宙警備隊の起源は、銅像になっているゾフィーさんの時代までさかのぼります！」

像の前に立って熱弁を振るい始めるメビウス。

一同「は？」

メビウス「今から何十万年も前に、このウルチヨラの…」

メビウス、何故か囁む。

ゼロ「プッ！」

デデーン

『ゼロ OUT』

ゼロ「途中で囁むな！」

спан！

ゼロ「ぐあっ！」

ゼロのクレームを無視して笑顔のメビウス。

ゼロがシバかれた後、メビウスが謎な話しを始める。

メビウス「ウルトラの星で、ある凶暴な宇宙人、黒光りエンペラ星人が現れました！」

ナイス「黒光りって…」

メビウス「そんな時……ゲッホゴホ！」

今度は咳き込むメビウス。

ゼロ「ププッ」

デデーン

ゼロ「クソッ……！咳もするな！」

グレンファイヤー「笑わなきゃいい話しだろ？」

『ゼロ OUT』

スパン！

ゼロ「ぐう……！」

メビウス「……そんな時に、この像にもなっているゾフィーが立ち上がったんです！」

ジャンボット「ほう」

メビウス「ゾフィーはある日、黒光りエンペラ星人を宴会に誘って酔わせてる隙にくすぐって倒したんです！！」

一同「ハア？」

意味不明な話しに一同困惑。

メビウス「そしてこの事件を契機として、UGK宇宙警備隊が誕生しました！……スッバラシイッ！！」

メビウスが某会長の台詞を言った途端……

グレンファイヤー「ガハハハ！今のは反則だろ」

ミラーナイト「プププッ」

デデーン

『グレンファイヤー ミラーナイト O U T』

спан！×2

グレンファイヤー「あっ！」

ミラーナイト「うう…！」

メビウス「以上がこの警備隊の誕生秘話でした！さあ皆さん、中へと入りましょう！」

一同「ハイハイ…」

5人の地獄は、まだ始まったばかり……

警備隊のひみつ（後書き）

次回は隊長や受け付け嬢が登場します W

受付嬢と隊長（前書き）

やっと出来ました。

受付嬢と隊長

メビウスに先導されるまま、参加者一同がいよいよ警備隊本部のエントランスに入った。

メビウス「実は私たち警備隊には、有名な受付嬢がいるんですよ！」

グレンファイヤー「おうそれは楽しみだな！」

ナイス「同じく！」

テンションを上げるグレンファイヤーとナイス。一方ジャンボットは「くだらない」とでも言いたそうな雰囲気だ。

メビウス「まあとりあえずこちらに……」

メビウスの案内で5人が歩く。

その後、いかにも受付窓口みたいな所に着いた。

しかし、其処には誰もいなかった。

グレンファイヤー「おいおい！誰もいないじゃないか!?!」

メビウス「あれれ〜？おかしいぞ〜？確か今日は来ているって言うてたんですけど……」

メビウスの微妙な演技の直後、一同が先ほど入ってきた入り口から、車のエンジン音が聞こえてきた。

一同「？」

一同が入り口を見ると、何故か黒塗りのリムジンがエントランスに侵入していた。

リムジンはゆっくりと一同の前まで走ってきて、その後止まった。

ガチャ

リムジンの後部座席のドアが開く。出てきたのは……

ウルトラの父「ハーイ。メビウスご苦労様♪」

受付嬢の格好……つまり女装したウルトラの父だった。

一同「プツ……アハハハッ！」

当然笑いを堪えきれない一同。

デデーン

『全員 OUT』

スパン！×4 ドガシャー！！

ゼロ「ぐう！……何でウルトラの父が……」

ミラーナイト「薄々警戒していたけど……ダメだった……」

ジャンボット「コレは……無理だ」

それぞれの愚痴が漏れる中、モデル歩きを披露して受付窓口の席に座るウルトラの父。

ウルトラの父「其処の5人ジャーはどちら様？」

ジャンボット「ククッ…」

デデーン

『ジャンボット OUT』

グレンファイヤー「お前こういうのに弱いのか？」

ドガシャー！！

ジャンボット「グアッ…！言うな…」

もうジャンボットの尻の部分はひび割れ寸前だ。

ウルトラの父「其処の5人ジャーは？」

メビウス「はい！こちらの皆さんは新しく入隊する新人の隊員です！」

ウルトラの父「へえ、頑張ってね」

• ねぎらいの言葉だったが、一同は始めて嬉しくない気分になった……

・
・
ゼロ「もう嫌だ…」

メビウス「ハイハイ。愚痴はそこまでにしてくださいね？」

笑顔のまま毒舌を吐くメビウス。

一同は何処に連れて行かれているのかわからない状況だ。

メビウス「次の角を曲がったら隊長室です！」

どうやら隊長室に行くようだ。

メビウス「ですから…くれぐれも失礼のないようにお願いしますね？」

その最中に、前方にある女子トイレの扉が開いた。

中からは、ウルトラマンジャスティスが真顔で出てきた。

ゼロ「プブッ」

デデーン

『ゼロ OUT』

спан！

ゼロ「痛ッ！！」

メビウス「因みに言っておきますが……ジャスティスの人間体は女

性ですよ？」

ゼロ「なん…だと…」

メビウス「さあさあ！まもなく隊長室です！」

メビウスに案内された先には、豪華な装飾に包まれた「隊長室」と書かれた扉だった。

先にメビウスが扉をノックし、部屋に入る。

メビウス「失礼します。この度新たに入隊した新人の隊員5人を連れて参りました！」

隊長「入りなさい」

メビウス「皆さん入ってください」

メビウスに言われるまま、中へと入る5人。

5人はメビウスに言われて、隊長が座っているデスクトップの前に横一列に整列した。

隊長は、椅子に座ったまま後ろを向いていて、顔がわからない。

メビウス「隊長！彼等が新人の隊員です！」

隊長「ほうほう。彼等が……」

隊長が回転する椅子に座ったまま振り向く。その正体は……

一同「ブブツ…」

デデーン

『全員 O U T』

巫女服のコスプレをしたユリアンだった……

スパン！×4 ドガシャ！！

ユリアン「UGK宇宙警備隊へようこそ。私が隊長のユリアンですの！」

某キャラの口癖を披露する隊長。

ナイス「プブツ」

デデーン

『ナイス O U T』

スパン！

ナイス「ギャツ！」

ユリアン「こうして見ると…格好いいわね」

ユリアンがニヤニヤしてきた。

ユリアン「そうだ！折角だからあだ名を考えてあげるわ！」

一同「ハア？」

一同が哑然とする中、ユリアンが一方的に始めた。

ユリアン「まずは貴方ね…」

ゼロ「俺か？」

ユリアン「刹○はどう？」

ゼロ「止めろ！」

グレンファイヤー「ククッ」

デデーン

『グレンファイヤー OUT』

спан！

グレンファイヤー「イデデデッ！」

他作品のキャラ名を躊躇なく使うユリアン。

ユリアン「ダメなの？…だったら將軍で」

ゼロ「何故だ？」

ゼロのあだ名、将軍に決定。

将軍「一方的に決めるな！そしてアイコンも変えるな！」

ユリアン「次はキミね」

グレンファイヤー「俺のことか？」

ユリアン「ス○夫はどう？」

グレンファイヤー「このファイヤースティックはパパが買ってくれたんだぞ！…って違うう！」

グレンファイヤーは勢いよくノリツツコミをした。

ミラーナイト「フフッ」

デデーン

『ミラーナイト OUT』

スパン！

ミラーナイト「ぐっ！」

ユリアン「ス○夫がダメなら……ミスターファイヤーヘッドで」

将軍「何処かで聞いたことが…ってまだこの表記か…」

グレンファイヤーのあだ名はミスターファイヤーヘッドに決定。

ミスターファイヤーヘッド「まあ、だいたい合ってるからいいか…」

ユリアン「次」

ユリアンが指差したのは…

ナイス「ワタクシでしょうか？」

ユリアン「爆竹で」

ナイス「はい!？」

あっけらかんとした口調でユリアンが言った。

将軍「爆竹…アハハハ」

ミスターファイヤーヘッド「何処でそのネタを…アツハハハ!」

ミラーナイト「プブツ」

ジャンボット「フフツ、キミにぴったりの名前ではないか」

デデーン

『ゼロ グレンファイヤー ミラーナイト ジャンボット OUT』

スパン!×3 ドガシャ!!

ナイスは爆竹に決定。

ユリアン「次は其処の絶望が○ダム」

ジャンボット「絶望したッ！ガ○ダムと間違われたのに絶望したッ！」

將軍「ハハハッ…おい！俺を笑わせてどうするんだ！？」

デデーン

『ゼロ OUT』

スパン！

ゼロ「アーツ！」

ユリアン「アナタは…グリッドマンで」

ジャンボット「…何だそれは？」

ユリアン「似てるから」

ジャンボットはグリッドマンに決定。

ユリアン「さあ！入隊したからには頑張ってもらおうよ？」

ユリアンが一同を送り出そうとしたその時。

ミラーナイト「あの…。まだ僕のあだ名が……」

ユリアン「えー」

一人ハブられていたミラーナイトの提案に、突然面倒くさくなっているユリアン。

ユリアン「しょうがないなー……じゃあ体育座りで」

ミラーナイト「なっ……!」

4人「体育座り……プハハハッ!」

ミラーナイトのあだ名に、4人一度に吹き出してしまった。

デデーン

『ゼロ グレンファイヤー ジャンボット ナイス O U T』

スパン!×3 ドガシャ!!

ミラーナイト「ああ……結局こうなるんだ……」

O r z になったミラーナイトのあだ名は体育座りとなった……

現在の時間

A・M・11・00

(残り22時間)

受付嬢と隊長（後書き）

次回は引き出しの中が出てきます。

震えろ！ 笑止地獄 その1（前書き）

やっとこさ出来ました？

震えろ！ 笑止地獄 その1

メビウス「みなさうん。ちゃんと付いて来てくださうい」

一同「ハイハイ…」

開始から2時間…まだ半分にも達していないが、既に5人の尻は限界だった。

一同は隊長室を後にしており、またメビウスに何処かへ連れて行かれていた。

メビウス「さあ…着きましたよ」

将軍「今度は何なんだ…？」

あだ名表記のままの5人がたどり着いた部屋は、向かい合わせで置かれた机と椅子がある何かの事務室みたいな部屋だった。

メビウス「ココが皆さんの事務室兼休憩室です」

この部屋の大まかなことを述べたメビウスは、同時に席一つ一つを指差して言った。

メビウス「奥の左側が将軍さん」

将軍「将軍じゃないゼロだ」

メビウス「隣がミスターファイヤーヘッドさん」

ミスターファイヤーヘッド「グレンファイヤーだ」

メビウス「手前の左側がグリッドマンさん」

グリッドマン「私にはジャンボットという名前がある…」

メビウス「隣が爆竹さんです」

爆竹「はい…」

メビウスはあだ名で席の位置を指定した。

メビウス「以上です！」

体育座り「あのく僕の席は？」

またしてもハブられる体育座りことミラーナイト。

メビウス「おめーの席ねえから!!」

体育座り「な……」

メビウスがドスの効いた発言を聞き…

将軍「アハハハッ！」

ミスターファイヤーヘッド「またハブられるのかよ!?!?……フハハハッ！」

デデーン

『ゼロ グレンファイヤー O U T』

スパン！×2

体育座り「ああ……結局僕は………」

二人がシバかれる中、隅っこに隠れてあだ名の通りに体育座りを始めるミラーナイト。心なしか負のオーラが溢れている。

4人「ミラーナイト……プハハハッ！！」

シュールな光景に思わず笑ってしまう4人。メビウスも笑っていた。

デデーン

『ゼロ グレンファイヤー ジャンボット ナイス O U T』

スパン！×3 ドガシャー！！

体育座り「ああ……見ないでくれ……こんなに醜く惨めな姿を……見ないでくれ……」

独り言を呟くが、それを聞いてくれる者はいなかった……

・
・
・

メビウス「それでは……次に来るまでゆっくりして行ってね！……！」

4人「ハイハイ」

メビウス「ですが…引き出しの中は絶対に覗かないでくださいね？」

メビウスは一瞬顔色が変わったが、すぐに部屋を後にした。

メビウスが退室した後、4人は深いため息を吐いて愚痴を言い始めた。

尚、ミラーナイトは相変わらず体育座りなので見てると笑ってしま
う為、敢えて4人は無視している。

ゼロ「はあ……やっといなくなった……」

グレンファイヤー「まさかこんなにキツイとはな…」

ナイス「尻の穴が2つに割れそうだ…」

グレンファイヤー「もう割れてんじゃねえか」

ゼロ「プツ」

デデーン

『ゼロ OUT』

ゼロ「あゝ！…勝手に笑わせるな！」

ナイス「サーセン…」

スパン！

ゼロ「ぐあっ！」

ジャンボット「…なんだかんでゼロとグレンファイヤーが一番罰を受けてないか？」

グレンファイヤー「まあな…」

ゼロ「尻がパンパンだぜ…」

指摘された二人は腫れた尻を触る。

ジャンボット「私は少ないが…尻部の損傷度が限界だ……」

3人がまたため息を吐く中、ナイスは……

ガラガラ…

引き出しに手を掛け、中身を見ていた。

ジャンボット「！…何をやってる！？メビウスは開けるなど…！」

それを見たジャンボットが慌て始める。

グレンファイヤー「いいじゃねえか。それに開けるなど言われる程、俺達は…」

ゼロ「開けたくなる…だろ？」

グレンファイヤー「ああ」

ゼロとグレンファイヤーも引き出しに手を掛けた。

ジャンボット「ええい無礼者！」

ジャンボットが怒鳴り散らす。ミラーナイトはまだ負のオーラから抜け出せていない。

ナイス「アレ？　なんかコレが……」

ナイスが引き出しから取り出して机に置いたのは、“S”と書かれたスイッチ。

グレンファイヤー「お？　こっちにもあったぜ？」

グレンファイヤーが見つけたのは、“GA”と書かれたスイッチ。

ゼロ「俺のところにもだ」

ゼロの引き出しには、何も書かれていない黒いスイッチだった。

ジャンボット「ぬう……仕方ない……私にはこれだ」

皆が引き出しを探索する中、その雰囲気を押されたジャンボットも開けた。

其処に入っていたのは、“絶対に押すな！”と書かれた白いスイッチだった。

グレンファイヤー「……絶対に押すな！」って押してくれみたいなモ

ノだな…」

ナイス「確かに…」

ジャンボット「押したら許さないぞ？」

グレンファイヤー「わかったわかった」

了承はしたグレンファイヤーだったが、おそらく後々押すつもりだろう顔色である。

ナイス「じゃあまずコレから…ポチッとな」

カチッ

3人「押した!？」

ナイスはおもむろに“S”のスイッチを押した。

ナイス「アレ?何も起こらな」

ピチャッ

ナイス「へ？」

3人「あ……」

突然ナイスの頭上に何かが落ちてきた。しかもいい臭い。一方3人は啞然とした表情である。

ナイス「一体何が……」

ナイスは自分の頭に乗っているモノを手取る。そのモノの正体は……

ナイス「シャケだあああああ!!」

弁当でよく見かける、シャケの身だった……

3人「プツハハハハハ!!」

雄叫びと同時に3人が笑い……

デデーン

『ゼロ グレンファイヤー ジャンボット O U T』

спан!×2 ドガシャ!!

ミラーナイト「ああ……もう嫌だ……僕なんか……」

そんな悲（喜）劇の中でも、自分の世界にいるミラーナイトだった……

震えろ！ 笑止地獄 その1（後書き）

最近遅れて申し訳ありません？

後わかっているかと思いますが、各サブタイトルはウルトラマンシリーズのサブタイトルのものじりです。

これから夏休みですが、相変わらず遅くなると思いますが、どうか次回もお楽しみに……

震えろ！ 笑止地獄 その2

グレンファイヤー「要するにこのスイッチを押すとシャケが降ってくる、っていうことか？」

ジャンボット「じゃないのか？」

未だ体育座りのミラーナイトを除いた4人は、ナイスの席の引き出しから出てきた“S”のスイッチを速やかに別の棚の上に置いた。

残るスイッチは3つ、果たしてどうするべきかの議論が続いていた。

ゼロ「よし、コイツを押そう」

ゼロは自分の引き出しに入っていた黒いスイッチを持った。

ジャンボット「待て、嫌な予感がする」

ナイス「そうっすよ。ひょっとしたらこけしが降ってきたり……」

ゼロ「何でこけしなんだ？」

ナイスの発言に訝しみながらも、ゼロはごく普通にボタンのスイッチを押した。

ゼロ「ポチッとな」

ジャンボット「言ってるそばから……」

《♪デデデンデデデンデデデンデデデン♪》

4人「は？」

軽快な音楽が部屋中に響き渡ったかと思うと、4人の目の前にあった液晶テレビが点き、場面に表示されたのは……

『宇宙ダービー！尻を叩かれてほしいのは誰！？』

メビウス『どうもどうも。ウルトラマンメビウスです！早速この五人の中で一番尻を叩かれてほしい方を、出会った方を選んでもらいたいと思います！』

メビウスが登場し、五人の写真が載ったボードとマイクを持っている。さながらアナウンサーである。

メビウス『すいませ〜ん』

開始早々メビウスが誰かに声を掛けた。

カネゴン『ん？』

声を掛けられたのはカネゴンだった。

メビウス『この中でお尻を叩かれてほしいのは誰ですか？』

早速メビウスがカネゴンにマイクを向け、ボードを見せた。

カネゴン『うーん。ゼロかな？』

メビウス『何故ですか？』

カネゴン『無い！』

メビウス『ありがとうございます！……それでは』

メビウスが手を振り、映像が途切れた。直後、

デデーン

『ゼロ OUT』

ゼロ「?…おい、俺笑っていないぞ？」

暫く映像を鑑賞していたゼロは、突然の宣告にとぼけた表情。

その間にダークロプスが入って来た。

ゼロ「待て待て！笑ってないって言ってるだろ!？」

グレンファイヤー「いやいや、さっきの映像見ただろ？」

スパン！

ゼロ「ぐあっ!……なるほど、そういうことか…」

四つん這いの姿勢のまま、ゼロはようやく自分が罰を受けた理由を察した。

ジャンボット「つまりこの黒いスイッチを押すと誰かがOUTにな

るのか」

ナイス「けっこうヤバイかも…」

黒いスイッチの正体を知った為、用済みとばかりにスイッチを片付けようとしたが……

ゼロ「寄越せ！」

スイッチを無理矢理持ったゼロが、勢いのままスイッチを押した。

『♪デーンデーンデデンデデンデデンデデン♪』

再び軽快な音楽が流れ、テレビの電源が点いた。

グレンファイヤー「ゼロ!？」

ゼロ「リベンジだ!二度目はねえだろ!？」

ジャンボット「勝手なことを！」

ナイス「あ、始まったよ」

ナイスの言う通り、映像に改めてタイトルが表示される。今度は趣向が変わっており、5回選ばれると罰を受ける仕組みだった。

セブン『もちろんゼロだな』

ゼロ「親父ィ……」

セブン『昨日のバーベキューパーティーをサボったしな!』

ゼロ「どんな理由だッ!」

グレンファイヤー「フッフッ…」

※既に笑いましたが最後までお楽しみください。

マグマ星人『ナイスに決まってるでしょ? W W W』

ナイス「マグマエ……」

マグマ星人『だってアイツ面白くねーし W W W』

ナイス「おい!」

ナイス、場面に向けてツツコミ。

ゼロ「クククッ」

ジャンボット「フフン」

ゾフィー『グレンファイヤー彼だな』

グレンファイヤー「俺?」

ゾフィー『なんか…気に入らない』

グレンファイヤー「おいおい…」

ペダン星人『コイツ（ジャンボット）だ』

ジャンボット「私か…」

ペダン星人『キングジョーと被る。二番煎じだ』

ジャンボット「無礼者！全く似てないだろ！？」

バルタン星人『フオフオフオ……』

ゼロ「プププ…」

ナイス「日本語でおkwwww」

バルタン星人『フオフオフオフオフオフオ！』

※ゼロに一票入りました。

ゼロ「待て！アイツフオフオしか言っていないだろ！？」

ナイス「アッハハハ！」

ブラックギラス『ヌガーヌガー？』

レッドギラス『モガーモガー？』

グレンファイヤー「またwww」

ブラックギラス『ヌガーヌガーwww』

レッドグラス 『モガーモガー
WWW』

※ゼロにまた一票入りました。

ゼロ「だ・か・ら！」

エメラナ姫『ジャンに一票♪』

ジャンボット「ひめえええええ！」

ゼロ
「プ
ハ
ハ
ツ
！」

エメラナ姫『面白そう♪』

ジャンボット「絶望したッ！姫の好奇心に絶望したッ！！」

グレンファイヤー「クククツ…」

ゼロ「暴走するなジャンボット！」

ラン『ゼロだ』

ゼロ 「うおい!？」

ラン『俺の身体で遊びやがって！』

ジャンボット「ゼロ……キミにそんな趣味が……」

ゼロ「いやいや！しかもリーチだし！」

ゼロ、リーチ。

ベリアル『もちろんゼロだ!』

ゼロ「うわあああああ!」

ベリアル『悲鳴を聞いてみたいしな!』

パンパカパン。優勝はゼロでした。

デデーン

『ゼロ OUT』

テレビの映像が消え、音声が流れる。

ゼロ「こ、これは罠だ!」

スパン!

ゼロ「ぐわっ!」

グレンファイヤー「あーあ。見てらんないぜー(棒読み)」

デデーン

『グレンファイヤー ジャンボット ナイス OUT』

グレンファイヤー「あ…」

ジャンボット「確か…途中で笑ってたな…」

ナイス「結局罰を受ける仕組みかい…」

スパン！×2ドガシャ！！

ミラーナイト「いいよなあ…盛り上がれて…」

ミラーナイトは益々負のオーラを増大させていた。

そう。彼はアンケートの中でも一度も選ばれてなかったのである…！！

ミラーナイト「もう鏡の星もエメラナ姫もねえんだよ！」

負のオーラを出しながら、ふらふらと立ち上がるミラーナイト。

ゼロ「ヤバイ！このままだとマイナスエネルギーが増大して…！」

ナイス「地獄○弟の仲間入りだ！」

グレンファイヤー「それは面倒だな…」

ジャンボット「80来てくれ！」

結局、数分間の説得の末、なんとか正常に戻ったミラーナイトだった……

震えろ！ 笑止地獄 その2（後書き）

さあ！ゼロが連続OUTをスイッチのせいでした……

さてさて、残るスイッチは一体どんな仕掛けになっているんでしょうか。

次回をお楽しみに。

震えろ！ 笑止地獄 その3

ナイス「残るは……」

グレンファイヤー「この2つだな」

一つの机に置かれた2つのスイッチ。

それをじっと睨む五人。

尚、ミラーナイトは正常にこそ戻ったが、席がないので残りの四人は立っている。

ゼロ「先ずはこのGAスイッチから押すか？」

ミラーナイト「待ってくれ。“GA”の意味がわからない今は止めておいた方が……」

ジャンボット「ではキミは“絶対に押すな！”のスイッチを押せと
いうのか？ 私は断固辞退する」

グレンファイヤー「と言ってもよく。押さないと読者の皆さんがガッカリするぞ？」

ジャンボット「ちょっと待て。その発言は大丈夫か？」

グレンファイヤー「大丈夫だ。問題ない」

こんな調子の会話が続いていた。

ナイス「あゝ。お話しの途中よろしいでしょうか？」

ジャンボット「何だ？」

ナイス「ゼロさんが押してるんですけど……」

ジャンボット「なっ……」

ナイスの言う通り、ゼロがいつの間にかGAスイッチを押していた。

ジャンボット「何をしている！？人の話を聞いていなかったのか？……万死に値する！」

ゼロ「俺が…ウルトラm」

ズドーン！！

五人「！？」

二人が揉めている時に、突如何かが天井を突き破って落ちてきた。辺りを土煙がもうもうと上がる。

グレンファイヤー「な、何だよ？」

ミラーナイト「あれは……」

五人が見たのは……

ガイア「……………」

ウルトラマンガイアがOPの最後にやるあの着地をやっていた。

五人「……………」

ガイア「……………」

ガイアはゆっくりと立ち上がると、嘩然としている五人をチラ見し、歩いてその場を去った……

ガンッ！

と思ったら、低い天井に頭をぶつけ、舌打ちをしてから出て行った。

ナイス「フッフッ……」

デデーン

『ナイス O U T』

スパン！

ナイス「ぎゃん！」

ミラーナイト「今のは……」

グレンファイヤー「何だったんだ？」

ゼロ「さあ？」

終始ビミョーな空気の中、ジャンボットが突然、

ジャンボット「ポチッとな」

あろうことかGAスイッチを押してしまった。

ゼロ「うおい！またビミョーな空気を作る気かお前は！？」

ジャンボット「いいじゃないか…どうせスベるし……」

ゼロ「いやいや！そういう問題かよ！？」

立場逆転。ゼロがツツコミに回った。

ズドーン！！

そんな折、今度は別の天井が突き破られた。
現れたのは……

アグル「……………」

ドヤ顔のウルトラマンアグルだった……

グレンファイヤー「クククッ……」

あの空気を思い出していまい、思い出し笑いをしてしまった。

デデーン

『グレンファイヤー OUT』

спан！

グレンファイヤー「痛え！」

ドヤ顔でこちらを見つめながら、オー○リーの○日のような歩きで、部屋を去るアグルだった……

ジャンボット「……さあ！残るスイッチは後一つだ！」

自ら作った空気にも関わらず、流れを変えようと話題を別の話題にしようとするジャンボット。

ゼロ「そ、そうだな！」

とりあえず乗る一同。

グレンファイヤー「じゃあ、コレ押すぞ？」

ナイス「勢いで押すんですか!？」

ナイスのツツコミむなく、グレンファイヤーが最後のスイッチを押した。

【デデン ナイスOUT】

ナイス「え？」

グレンファイヤー「フッフツ…」

流れた音声にナイスは困惑、グレンファイヤーは失笑。

デデーン

『グレンファイヤー O U T』

ナイス「ちよっと待って！僕笑ってないよね？笑ってないよね？」

スパン！×2

ナイスの弁明は無視され、グレンファイヤーと一緒に罰を受けた。

ミラーナイト「……もしかしてそのスイッチは……」

ゼロ「待てよ。ひょっとしたらランダムでO U Tになるって仕組みかも知れないぞ？」

ジャンボット「だから“絶対に押すな！”か……」

ナイス「あゝ。もう一回は止めましょうよ？ランダムだったら誰かしらに迷惑が来るわけだし……」

なんだかもう一回押す雰囲気になり、ナイスは不安な表情。

グレンファイヤー「じゃあ押しちゃうぜ？」

ナイス「止めてえええ！！」

案の定だった……

【デデーン ナイスO U T】

ナイス「ほらやっぱり！」

四人「プハハハッ！」

予想通りの結果に爆笑する四人。

デデーン

『ゼロ ミラーナイト グレンファイヤー ジャンボット OUT』

スパン！×4 ドガシャ！

結局全員仲良く罰を受けた……

ナイス「（もうイヤ……）」

ゼロ「さあて、スイッチの検証は終わりだ」

ミラーナイト「次はどうするつもり？」

ジャンボット「他にもあるかも知れないな……」

懲りずに探そうとする四人。ナイスはもうイヤな雰囲気だったが……

メビウス「その必用ありません！」

グレンファイヤー「ホ！いつの間に！？」

本当にいつの間にか部屋に入っていたメビウスに止められ、ナイス

は一人安堵した。

メビウス「今から皆さんには、警備隊の施設のあちこちを見学してもらいます！」

グレンファイヤー「マジかよ？ダリィよ…」

メビウス「ですから早く支度してください」

五人「ウィース」

だが、この見学が普通の見学ではないことは容易に想像できた……

現在の時間 A.M. 11:30

(残り22時間半)

震えろ！ 笑止地獄 その3（後書き）

どうもお久しぶりです。

夏休みなのですが、宿題に追われ思うように作品の更新が出来ませんでした？

次回は、これだ！（ウルトラマン列伝風に）

様々な施設を巡る。

食堂、トレーニングルーム、学校……果たしてどんな罠が待ち受けているのか！？（内容を大きく変更する可能性があります）

それでは次回をお楽しみに……

連続トラップを超えてゆけ！ その1（前書き）

当初は一つのつもりでしたが……二つになりました。

連続トラップを超えてゆけ！ その1

メビウス「これから警備隊内部にある様々な施設を回って行きます」

五人「ハイハイ…」

メビウスに案内されるまま事務室を出て廊下を歩く五人。当然乗り気ではない。

メビウス「先ずはこちらです！」

メビウスが最初に紹介したのは、ダンベルやら鉄アレイやらの道具が大量に置いてある部屋だった。

メビウス「此処はトレーニングルームです。優秀なトレーナーの指導の下、日夜隊員が身体を鍛えています！」

グレンファイヤー「普通に使う分にはいいな」

メビウス「では！その優秀なトレーナーをご紹介致します！どうぞ！」

メビウスが指を差す。それと同時にその方向を振り向く五人。其処に立っていたのは……

パワード「ファイト一発！」

筋肉をガチムチに鍛え、ボディービルダーのようになっていたウルトラマンパワードだった……

五人「アッハハハッ!!」

たまらず笑ってしまう五人。

デデーン

『全員 OUT』

спан!×4 ドガシャ!

メビウス「こちらが優秀なトレーナー、パスワードさんです!」

パスワード「キンニク、アレバ、ナンデモ、デキル!!」

拙い日本語と共に見事なポージングを決めるパスワード。

ゼロ「ブッ!」

グレンファイヤー「クククッ」

ナイス「フフフッ…」

デデーン

『ゼロ グレンファイヤー ナイス OUT』

спан!×3

メビウス「パスワードさん!何か一言を!」

パワード「キョーカラ、キミモ：P e r f e c t B o d y!」

再び見事なポーシングと共に一言。

五人「フフフツ…」

デデーン

『全員 O U T』

スパン!×4 ドガシャ!

またしても吹き出してしまふ五人だった……

・
・
・

メビウス「次はこちらです!」

続いて一同がやって来たのは……

ジャンボット「食堂か?」

メビウス「はい!こちらは隊員や各関係者の食堂です!」

ミラーナイト「食堂で思い出したけど……僕たちの食事は何時に……」

そう。五人はもうすぐ昼ご飯の時間になる頃にも関わらず、まだ食事はおろか飲み物すら飲んでいないのだ。

メビウス「あそこで食事をしている方に感想を聞いてみましょう！」

ゼロ「無視すんな！」

結局無視され、メビウスの言うままインタビューに向かった。

メビウス「すみません、ちょっといいでしょうか？」

声を掛けたのは、席に座って蕎麦を食べていたウルトラマンネオスだった。

ネオス「なんだい？」

メビウス「此処の食堂は最高ですか？」

ネオス「最高だ。例えばこうやって……」

そう言うとネオスは、おもむろに蕎麦をすすり始めた。

五人は何をするのかわからない表情。

そんな時……

ネオス「ふん！」

いきなり鼻息を吹き出す。すると口に入っていた蕎麦が、鼻の穴から一本垂れていた。

五人「クククッ……」

デデーン

『全員 O U T』

スパン！×4 ドガシャ！・

・

メビウス「さあ！次に向かうのは……」

ゼロ「もう勘弁してくれ……」

ナイス「いいでしょ？もう……」

嫌になってきた五人を無視し、笑顔に案内するメビウス。Sの気があるのかもしれない。

メビウス「僕たちはただ単に怪獣や宇宙人を倒すのではなく、その更正も重点に入れて宇宙の平和を守っています！」

ジャンボット「それはいいな……」

素直に感心する五人。すると奥の角から怒号が聞こえてきた。おそるおそる覗いてみると……

コスモス「何で地球になんか来たんだ！？」

ウルトラマンコスモスが三体の宇宙人を叱っていた。どうやらこの光景が更正プランの一貫らしい。

ツルク星人「そりゃ、ウルトラマンレオと戦いたかったからさ」

コスモス「そうか、なら帰ってよし。キミは？」

テンペラー星人「全宇宙を征服する為だ！」

コスモス「そうか、なら帰ってよし」

ジャンボット「随分寛大だな？」

ミラーナイト「確かに……」

コスモス「キミは!？」

アンヘル星人トーリ「クロノームに星を滅ぼされたから……」

コスモス「黙れえええ!!」

突然哀れなアンヘル星人トーリに“だけ”コロナモードに変身して
ネイバスター光線を撃つコスモス。

アンヘル星人トーリ「だから地球へ……」

コスモス「うるせえ!!」

尚も理由を述べるトーリに、今度はエクリプスモードになってコズ
ミューム光線を放つコスモス。

アンヘル星人トーリ「同胞は皆……」

コスモス「だから黙れえええ!!」

まだ言うトリーにだめ押しとばかりにフューチャーモードになって
コスモストライク。

コスモス「来い！鍛えなおしてやる！」

倒れているトリーを引きずって何処かへ連れて行くコスモス。
もちろん一部始終を見た五人は……

五人「アッハハハッ！！」

デデーン

『全員 OUT』

ゼロ「な、これはWWW」

グレンファイヤー「理不尽過ぎるWWW」

ナイス「笑わずにはいられないWWW」

スパン！×4 ドガシャ！・

・

メビウス「こちらです」

一同がたどり着いた場所は見るからに病院だった。

メビウス「此処はウルトラ病院です！此処ではケガをした隊員達の
治療を行っています！」

ナイス「へえ」

ゼロ「今のところ10へえだな」

グレンファイヤー「トリ〇ア〇泉かよ……」

ナイス「プッ！」

デデーン

『ナイス OUT』

ナイス「何言わせてるんですか！？僕たちチームですよね！？何でさっきから僕が……」

спан！

ナイス「痛い痛い！」

グレンファイヤー「聞こえない聞こえない」

メビウス「ではでは。早速中へ……レッツラゴー」

遂に仲間割れを始めた五人を余所に、メビウスは入り口へと入って行った。

メビウス「こちらの病室へどうぞ！」

メビウスが一つの病室へ案内した。

メビウス「失礼します！」

メビウスが先に入り、お辞儀をする。出迎えたのは……

ウルトラの母「いらっしやい」

看護師の服に身を包んだウルトラの母だった。そのすぐ側に、三台のベッドがあり、掛け布団が敷かれて、誰が寝てるか分からないようになっている。

ウルトラの母「そちらの五人は？」

ウルトラの母は後から入って来た五人を指差した。

メビウス「ご紹介致します。新しく入った新人の隊員です」

ウルトラの母「あらそう？頑張ってるね」

メビウス「皆さんにもご紹介致します！此処の院長兼看護師のウルトラの母です！」

ゼロ「知ってるぞ…」

一人静かに呟くゼロ。だが当然誰も聞いていなかった。

ウルトラの母「此処の病室は、特に治療が必要な隊員が居ます。三人とも麻酔が効いていて全く起きません」

ウルトラの母が、おもむろに向かって左側の掛け布団をどかし、患

者の姿が露になる。

寝ていたのはウルトラセブン21だった。

ウルトラの母「彼はどんなことがあっても起きません。例えば……」

ビシッ！

突然ウルトラの母が寝ているセブン21にビンタをした。頬にアザが出来たが、セブン21は全く目覚めない。

五人「（よく我慢出来るな……）」

五人は必死に笑いを我慢していた。

全員Safe

ウルトラの母「続いては……」

今度は真ん中の掛け布団をどかす。寝ていたのは……

ゼロ「またゾフィーかよ!？」

今回既に四度目の登場のゾフィーだった。

ウルトラの母「彼も決して目覚めません。このように……」

ナイス「え?」

ミラーナイト「それは……」

いつの間にか、ウルトラの母が“20万トン”と書かれた巨大なハンマーを軽々と持ち上げていた。
そして……

ウルトラの母「ぬるぼっ!!」

謎の掛け声と共に、ハンマーを勢いよく振り下ろし、ゾフィーのドテッ腹に直撃させた。

ゾフィー「ひでぶっ!!」

ゾフィーは目玉が飛び出しそうな体制になった途端、全身を痙攣させ、口から泡を吹いて動かなくなった。

五人「アッハハハッ!!」

当然堪えきれない五人。近くにいたメビウスも笑っていた。

デデーン

『全員 OUT』

スパン!×4 ドガシャ!

ウルトラの母「…このように、全く起きません」

心なしか、若干息を切らしているウルトラの母。

最後に右側の掛け布団に手を掛ける。現れたのは……

五人「!…:…プハハハッ!」

患者の姿を見た五人は笑ってしまった。何故なら、カラータイマーを失ってペラペラになっているウルトラマンジャックだったからだ。

デデーン

『全員 OUT』

スパン!×4 ドガシャ!

ジャンボット「ぐう…!…:…何故彼はこんなことに?」

ウルトラの母「聞くとところによると…:…深夜に帰宅途中、ドロボンにカラータイマーをひったくられたみたいです…」

ミラーナイト「…:…治るんですか?」

ウルトラの母「お湯に浸けて3分間待てば…」

ゼロ「カップラーメンかよ…」

グレンファイヤー「フフフツ…」

ナイス「クククツ」

デデーン

『グレンファイヤー ナイス OUT』

スパン！×2

メビウス「ありがとうございました！僕たちはこれから行くところがあるので……」

ウルトラの母「あら。ではまた……」

メビウスに促され、病室を後にする一同だった……

・
・
・

ゼロ「次は何処に行くんだ？」

メビウス「ウルトラ学校です！」

五人「ヴェ！？」

—その2に続く—

連続トラップを超えてゆけ！ その2

ゼロ「なあ、学校ってどんなところなんだ？」

メビウス「禁則事項です」

グレンファイヤー「どういうことだ？」

メビウス「禁則事項です」

ミラーナイト「さっきからそれしか言っていないような……」

メビウス「禁則事項です」

ジャンボット「だから！」

メビウス「禁則事項です」

ナイス「おい！」

ウルトラ学校に入った方がいいが、何処に行くのか全くわからない五人。肝心のメビウスも先程から返事がない、ただの屍のようだ状態だった。

グレンファイヤー「まったく！コイツどうしたんだ？」

ゼロ「わからない……」

メビウス「……次の角をマッガーレ」

ナイス「プッ！」

ミラーナイト「フフフッ…」

デデーン

急にメビウスがしゃべったかと思うと、訳のわからない単語が飛び出した。

『ミラーナイト ナイス O U T』

スパン！×2

メビウス「更に角をマッガーレば紹介する教室です！」

ナイス「…同じ手はくありませんよ……」

・
・
・

メビウス「ウルトラ学校では、将来の宇宙警備隊隊員を生み出すべく教育しています！」

ゼロ「なるほど」

メビウス「では！早速1年E組の教室を覗いてみましょう！」

ジャンボット「何故そうなる…」

疑問を呈するジャンボットだったが、結局無意味なので一同は廊下から授業の様子を鑑賞することにした。

教室の教壇に立っていたのは……

80 「みんな！今日は授業を始める前に言わなきゃいけないことがある」

ゼロ 「やっぱり80か…」

ゼロの予想通り、担任の教師はウルトラマン80（エイティ）だった。しかし教室の雰囲気はなにやら悪そうだった。

80 「さっきメイツ星人をいじめたのは誰だ？本人から相談があったぞ？」

どうやらこれが雰囲気が悪化している理由のようだ。

生徒A 「先生！俺見ました！メイツくんをいじめたヤツを！」

生徒の1人が挙手をして立ち、犯人を見たと言いだした。

80 「誰だったんだ？」

生徒A 「ウルトラマンナイスです！」

ナイス 「はいイイイ！？」

突然の勧告に驚いたのは誰であろう、ナイス本人だ。

メビウスを含む他の五人も一斉にナイスを見る。

ナイス「い、いやいや！ワタクシはずっとあなた方達と一緒に……」

80 「ナイス：まさかキミが……あんなにクラスのムードメーカーだったじゃないか!？」

80が廊下にやって来た。

ナイス「いやいやいやいや！僕はこの学校の生徒じゃないし！1年E組じゃないし！」

80 「こうなったらしょうがない……ナイス！ OUT！」

デデーオン

『ナイス
OUT』

ナイス
「ええええええ!!」

OUT勧告に口を開けたまま叫ぶナイス。

しかもいつの間にかE組の生徒達がムチを持ってナイスに迫っていた。

80も加わって、その数、45人。

80 「みんな！行くぞ！」

ナイス 「なんじゃそりやあああ！！」

スパン！
×45

一斉に尻を叩かれるナイスを見た一同は……

ゼロ「ナイスWWW」

グレンファイヤー「お前さっきからヒドいなWWW」

ミラーナイト「フフフ…」

ジャンボット「すまん笑ってしまったWWW」

デデーン

『ゼロ グレンファイヤー ミラーナイト ジャンボット OUT』

スパン！×3 ドガシャ！

悲劇の中、ただ1人“計画通り”な笑みを浮かべたメビウスだった

……

・
・
・

メビウス「さあて続いては！」

ゼロ「もう止めてくれ……」

ゼロの言う通り、五人は再起不能な状態になっていた。（特にナイス）

メビウス「さもないと終わらないんですよ？」

相変わらず黒い笑みのメビウスだったが、そんな一同の間に、1人の警備隊隊員が慌てた様子でやって来た。

隊員「大変です！」

メビウス「どうかしたんですか？」

隊員「超古代遺跡が出現しました！」

メビウス「なんだって！？それは本当かい！？」

グレンファイヤー「…古代遺跡？」

ミラーナイト「一体どういうことなんだろう……」

ジャンボット「さあな……」

ゼロ「嫌な予感……」

ナイス「もう嫌だ……」

ネガティブな考えの五人だったが、見事的中することになるのは言うまでもなかった……

ただいまの時間

P・M・12・00

（残り21時間）

連続トラップを超えてゆけ！ その2（後書き）

今回は短めでした。

次回は超古代遺跡ということで……既に察してる方をいると思います？

以下、勝手な呟きです。

それはそうと、この前友人とウルフェスに行って来ました。「何か貴重な指人形があるんじゃないかね？」ということになり、指人形コーナーをちびつこと一緒に掻き分けた筆者と友人。

すると筆者が、売られている指人形の一覧にもない、「テラノイド」の指人形を発掘し、速攻購入しました（↑おい）。

その他気に入った指人形とお土産諸々も購入して、大満足で帰って来ましたwww

以上、オチが中途半端な呟きでした。

次回もお楽しみに……

遺跡は笑いの刺客！（前書き）

気が付いたらPVが一万超えに……ありがとうございます！！

遺跡は笑いの刺客！

メビウスを含めた六人は、駆け足で超古代遺跡が出現した場所へと到着した。

其処には明らかに周囲と場違いな雰囲気醸し出した遺跡が佇んでいた。

入り口らしき穴が真ん中に見える。

ミラーナイト「す、素直にすごい……」

グレンファイヤー「本当に遺跡じゃねえか。完成度たけーなオイ」

ジャンボット「美術スタッフ乙、と言わざるを得ない」

ナイス「中はどうなってるんだろう……」

ゼロ「俺も気になってた」

五人はクオリティの高い遺跡に感嘆としていた。

メビウス「じゃあ、早速中へ入ってみましょう！」

五人「いいのか！？」

メビウスが言いいいながら中へと入ろうとしていたのを、同時に突っ込む五人。

メビウス「許可はもらってますし、発掘隊が来る前に入ってしまったでしょう！」

五人「やれやれ…」

先に入ったメビウスに続き、渋々後に続く五人だった…

・
・
・

ジャンボット「内部もすごいな」

ナイス「壁画もある…」

薄暗く、涼しい内部はゴルザやメルバ等の超古代怪獣と、それと戦う光の巨人達の壁画が多数描かれていた。

メビウス「この先に棺があるという情報があります」

グレンファイヤー「マジかよ？」

メビウス「しかもですよ……棺の中にいる人物……生きてるらしいです…」

ゼロ「嘘だろ!？」

ミラーナイト「生きてるって…」

衝撃の事実、五人は大きな声を上げた。中で反響するほどの大声で。

メビウス「まもなくその棺の場所です…」

メビウスが言うと同時に、薄暗い道の先に、一筋の明るい光が差し込んだ。

見てみると、棺が一つポツンと置かれている部屋だった。部屋の周りは相変わらず壁画で埋め尽くされていた。

メビウス「どうやらこの部屋こそが、今から三千万年前に実在していた戦士の墓のようですね……」

六人が思った以上に広い部屋に入り、全員が棺を見たその時だった。

ゼロ「おい！棺が動いたぞ！？」

ゼロの言う通り、棺がガタガタと震えだし、しばらくすると蓋がゆっくりと開けられ始めた。

ナイス「嫌あああ！マジで生きてる！！」

ジャンボット「中に誰が……」

ジャンボットが言った直後、中に葬られているはずの戦士が姿を現した……

ティガダーク「ふわあああ。よく寝た」

五人「え？」

まるで寝起きのような台詞で棺から出てきたのは、ウルトラマンテ

イガ、それもティガダークの姿だった。

ティガダーク「さすがに三千万年も寝てると腰が痛い…」

おっさんのような独り言を言い始めたティガダーク。

五人「フハハハ……」

思わず五人、小さく笑う。

デデーン

『全員 OUT』

スパン！×4ドガシャ！

メビウス「あゝ。失礼ですが黒いですね？」

五人が罰を受けた後、メビウスが何気ない質問をしたが……

ティガダーク「え、嘘！？俺黒い！？」

驚いたのは他ならないティガダークだった。

ティガダーク「ヤベエ！もしかしたら三千万年も寝てたせいで垢が増えたかも……」

どうやら黒いのは垢がたまっているかららしい。

ゼロ「プフツ」

デデーン

『ゼロ OUT』

スパン！

グレンファイヤー「ゼロのヤツ、我慢出来なかったな…」

ティガダーク「急いで洗わないと！」

慌てた様子のティガダークは、棺を囲む壁の一部を押し込む。すると壁が開き、シャワールームが現れた。

グレンファイヤー「其処にあるのかよ!？」

ナイス「プツ」

ミラーナイト「フッフ…」

デデーン

『ミラーナイト ナイス OUT』

スパン!×2

二人が罰を受ける中、シャワールームに入って行くティガダークだった……

・
・

・
ティガ「汚れ落ちた？」

しばらく経って出てきたティガだったが、垢が落ちていたのは一部分だけで、ティガトルネードみたいになっている。

ゼロ「落ちてねえ…」

ティガトルネード「本当だ！待ってて！」

再びシャワールームへと入って行ったティガだった……

ジャンボット「彼はひょっとして、ろくに身体を洗っていないのでは…？」

・
・
・

ティガ「今度こそ！」

自信満々に出てきたティガだったが……

ジャンボット「…まだだ。因みに頭を何故先に洗わない？」

ジャンボットの指摘通り、ティガは頭やボディラインにまだ汚れがついていて、ティガブラストのような姿になっていた。

ティガブラスト「マジで！？じゃあもうちょい待ってて」

みたびシャワールームへと消えて行ったティガ。

ミラーナイト「随分大雑把だね…」

グレンファイヤー「俺でも最低1日2回は入るぜ？」

ゼロ「プフッ！」

デデーン

『ゼロ OUT』

グレンファイヤーの発言が予想外だったのか、ゼロが1人吹き出してしまった。

ゼロ「入るのかよ!?!」

グレンファイヤー「当たり前だろ? まさか、俺を不潔なヤツだとも思っていたのか?」

ゼロ「クッ…」

スパン!

・
・
・

ティガ「もう大丈夫でしょ?」

三度の失敗の後、ようやくティガはマルチタイプの姿に戻っていた。

ゼロ「大丈夫だ。問題ない」

ティガ「よかった。あ、そうだ。棺の中に抱き枕なかった？」

五人「プフツ…」

ティガのカミングアウトに、五人は薄ら笑いを浮かべた。

デデーン

『全員 OUT』

スパン！×4ドガシャ！

メビウス「いえ。僕達が来た時は何もありませんでしたよ？」

罰を受けている五人の代わりにメビウスが答えた。

ティガ「な、なんだって！？」

またしても驚いたのはティガ自身だった。

ティガ「そんな……レナの抱き枕がないなんて………ウゾダドンド
コドーン！！」

土下座のような体制でガツクリとするティガ。

グレンファイヤー「今なんて言ったんだ？」

ミラーナイト「『嘘だそんなことー！！』じゃない？」

ジャンボット「それにしても……レナとは誰だ？」

ナイス「あ、僕知ってますよ」

そう言うとなイスは、懐から写真を一枚取り出した。

ゼロ「なんでお前が持ってるんだよ？」

ナイス「僕の住む世界は、ティガがテレビ放送されているんですよ」

ゼロ「なるほど…」

ミラーナイト「ティガが写っているね。隣にいる女性が、レナさんじゃない？」

ミラーナイトが指差す先には、ティガと肩を寄せ合っていて仲睦まじい様子の若い女性が写っていた。

ジャンボット「中々の美人だな」

グレンファイヤー「お前にとっての美人の条件って何だ？」

ジャンボット「うん？ 姫が最高だが？」

グレンファイヤー「プフッ」

デデーン

グレンファイヤー、自分から質問しておいて自爆。

『グレンファイヤー O U T』

スパン！

ティガ「ああ……レナ……一体キミは何処へ……」

ゼロ「まあだやってるな…」

ミラーナイト「僕みたいに重症だね」

ティガはまだ土下座のような体制だった。

ティガ「レナ……かぁいいモノは全部、『おっ持ち帰りい〜』って
いていたレナ……」

ナイス「そっちのレナ!？」

四人「何のことだ？」

ティガの独り言に驚いたのはナイスだけで、他の四人はポカンとした表情だった。

ナイス「まあ、後で教えます……」

ドガン!!

五人「!？」

突然、五人から見て右側の壁が粉々に吹き飛んだ。穴になった壁から出てきたのは……

カミィラ「またあの泥棒猫のところへ行ってたのね……」

光のムチを手に、黒いオーラを全開にしたカミィラだった。

ティガ「ひい！違うんだ！こ、これはその……」

カミィラを見たたん、飛び上がってダメ亭主のような反応のティガ。

カミィラ「これは…って何？こないだも盗撮したんですって!？」

ティガ「してません！盗撮なんてしてません!!」

カミィラ「ひどいわ!」

カミィラが叫んだ瞬間、腰を抜かしてへたりこんでいるティガをムチで思い切り殴打した。

カミィラ「私を捨てて…あんな女と幸せになろうだなんて!!」

更にムチで殴打。このままだと某エロゲーのバッドエンディングの時に流れる曲が聞こえてきそうだ。

ティガ「ぎゃん！痛い痛い!!」

五人「プハハハ!!」

芸人のようなアクションをするティガを見て、こらえ切れずに笑ってしまった五人。

デデーン

『全員 O U T』

спан！×4ドガシャ！

カミィラ「吹っ切れたわ……もう許さない……」

ティガ「か、勘弁してくれえ〜！」

間近で愛憎劇を見ながら、ティガと一緒に罰を受けることになった五人だった……

遺跡は笑いの刺客！（後書き）

ティガファンの皆様すみませんでしたorz

夏休みも終わったので忙しくなり、益々更新速度がスカイドン並に遅くなりますが……どうか気長にお待ちください。

仲間割れの発生!! その1 (前書き)

今回はあのウルトラマンが出てきます。

そしてまもなくPVが15000に行きそうです……もう本当に感謝の気持ちでいっぱいです……ありがとうございます!

仲間割れの発生!! その1

グレンファイヤー「あゝ。ひどい目に会った……」

ジャンボット「まったくだ。あのダメ亭主と共にムチ打ちとは……」

超古代遺跡から出てきたメビウスを含めた六人は、皆不満を口にしていた。

メビウス「これからはまたちょっと事務室に待機していただきます」

ミラーナイト「え……」

メビウスの言葉に、ミラーナイトは1人不安な表情をした。なぜなら先程事務室に入ったら自分の席“だけ”なかったからに他ならない。

メビウス「安心してください! 皆さんが出ている間、ミラーナイトさんの席はちゃんと用意しました!」

ミラーナイト「よかった……」

メビウスの発表を聞きミラーナイトは安堵した。

ゼロ「よかったなミラーナイト」

ナイス「これでゆっくり出来ますね!」

ミラーナイト「ありがとう」

四人から祝福、思わず笑顔のミラーナイトと四人だったが……

デデーン

ミラーナイト「え…？」

四人「あ…」

五人は完全に、このゲームのルールを忘れていた……

『全員 OUT』

スパン！×4ドガシャ！

ミラーナイト「ぐっ！……そんな…バカな……」

メビウス「さあさあ！事務室に戻りますよ？」

一瞬沈黙していた五人だったが、メビウスの一声を合図にようやく歩き始めた。

・
・
・

—事務室—

ゼロ「お？ちゃんとあるぜ？」

事務室に入った一同は、増えた机や椅子を見て改めて安堵した。もっとも、ミラーナイトは『これで座れる』という考えで、他の四人は『よかった！これでアイツが地獄の兄弟にならずに済む！』とい

う思考だったのだが。

メビウス「あ、席は自由に選んでください」

メビウスの一声の前に、一番奥の席にゼロ、向かって右側の二つにミラーナイトとジャンボットが、左側にグレンファイヤーとナイスが座っていた。

メビウス「では、まもなくお昼ご飯が運ばれて来ますので、しばらく待機しててくださいね？」

グレンファイヤー「ようやくメシが食えるのか」

ナイス「お腹ペコペコだったよ」

ゼロ「よし、一番いいのを頼む」

既に空腹だった五人は、メビウスの言葉を聞き、満足な表情（もちろん、ニコニコしているとOUTなので、中途半端な表情）を浮かべた。

メビウスが事務室から出ると、五人は深いため息を吐き、フリートークのような雰囲気になった。

グレンファイヤー「それにしてもよく。ココは時計がねえのか？」

ミラーナイト「そういえば…」

ジャンボット「確かに無いな…」

グレンファイヤーが指摘するまで気が付いてなかったが、事務室を含め全ての場所に時計は設置されていなかったのだ。おかげで今が何時かもわからない。

ナイス「あ、大丈夫ですよ。体内時計で分かるんで」

ゼロ「じゃあ聞くが、今何時だ？」

ナイス「12時くらいっすかね？」

四人「……………」

この瞬間、空気が変わった！

ナイス「アレ…………？」

ナイスのこんしんのギャグはすべってしまった！
こうかは、ばつぐんだ！

ナイス「……………」

しばらく落ち込むナイスだった……（因みに只今の時間はP・M・11:00）

ゼロ「ったくつまんないギャグやりやがって……」

ナイス「……しいましえん……………」

ビミョーな空気になってしまった事務室。

グレンファイヤー「そ、そうだ！また引き出し開けてみようぜ？」

話題を変えるべくグレンファイヤーが提唱した提案に、全員が無理矢理ノリ始めた。

ゼロ「そ、そうだな！ミラーナイト！開けてみろよ」

ミラーナイト「え…」

嫌なところでパスが来た、とミラーナイトは思った。

ジャンボット「そうだ！キミの席は新しく追加されたから、何か入っているかもしれない！」

ナイス「きっと変わった物が入っていますって！」

ミラーナイトに回された途端、他の四人が過剰に煽り始めた。つくづく無責任な奴等だ、と心の中でミラーナイトは思った。

ミラーナイト「わ、わかったよ…」

渋々引き出しを開けたミラーナイト。中に入っていたのは……

ミラーナイト「何だコレは…」

ミラーナイトが取り出して机に置いたのは、トリコロールカラーのスイッチだった。更に、“絶対に押すな！”と書かれた白いスイッチがまた出てきた。

それを見たナイスは再び暗い表情になった。

グレンファイヤー「やっぱり入っていたじゃねえか。押してみようぜ？」

ナイス「イヤイヤ!! 待ってください!!」

グレンファイヤーが真っ先に白いスイッチに手を掛けた途端、ナイスがうるさく止めに入った。

ジャンボット「プッ…」

それを見たジャンボットは、何故か小さく笑ってしまった。

デデーン

『ジャンボット OUT』

ナイス「何で笑ったんですか!？」

ジャンボット「いや違うんだ。キミが罰を受ける姿を想像してしまっ
ってな…」

ナイス「ひどっ! 今のけっこう傷つきましたよ!？」

ナイスのせいしんに大ダメージ!

ドガシャ!

ジャンボット「ぐう!」

ジャンボットはおしりに大ダメージ！

ミラーナイト「…まあまあ。その白いスイッチはいいとして、このトリコロールカラーのスイッチは何が起るかわからないからいいんじゃないかな？」

ミラーナイトは右手にトリコロールカラーのスイッチを持ち、四人に賛成を呼び掛けた。

ゼロ「おい、まさか冒険する気か？果てなき冒険スピリッツ！ってか？」

ミラーナイト「もしかしたら何も起らないかもしれないよ？」

ジャンボット「…一利あるな。よし、押してみよう」

グレンファイヤー「言っておくが、俺は押さないぞ？」

ナイス「同じく」

誰がスイッチを押すのか、という些細なことで何やら妙な雰囲気。

ゼロ「じゃあ俺が押そう！」

突然、ゼロが右手を挙げた。すると…

グレンファイヤー「いいや俺が押す！」

ナイス「いやいや僕が！」

ジャンボット「いや私だ!」

ミラーナイト“以外”の三人も一斉に手を挙げ、揉め始めた。挙げていないミラーナイトは1人、嫌な予感を感じていた。しかし……

ミラーナイト「……じゃあ僕が」

四人「あ、どうぞどうぞ!!」

案の定、煽られるようにミラーナイトがおそろおそろ右手を挙げた途端、四人がほぼ同時にミラーナイトにスイッチを押す役目を差し出した。

ミラーナイト「結局こうなるのか……」

四人「(計画通り!)」

ミラーナイトは渋々スイッチを押した。すると……

?「♪ツクツクボーウシ。ツクツクボーウシ。ツクツク……」

五人「は?」

何処からともなくツクツクボーウシの鳴き声が聞こえて来た。やがてそれは事務室の入り口付近からだった。

ガチャ、とドアが開き、入って来たのは……

ダイナ「♪ツクツクボーウシ。ツクツクボーウシ」

何故かセミのコスプレをしたウルトラマンダイナが、ツクツクボウシの声真似をしながらこちらに近づいて来た。

ダイナ「♪ツクツクボウシ」

五人「……」

ごにんは、ひっしにわらうのをがまんしている！

ダイナ「♪ツクツクボウシ。ツクツクボウシ」

ゼロ「…クッปปプ！……おい！」

しかし、ゼロはがまんすることができなかった！

デデーン

『ゼロ OUT』

ゼロ「ちつくしゅー！大体何でお前はキングゼミラみたいな格好しているんだよ！」

四人「……」

立ち上がってダイナに抗議するゼロ。一方他の四人は、依然沸き起こる笑いの衝動を必死に堪えていた。

そしてクレームを受けているダイナは、無言のままゼロの背後に回った。

ゼロ「?…お、おいまさか…」

ゼロの不安は的中した。

ダイナ「ホアチャー!!」

ドガッ!

ゼロ「ぐおっ!!」

ダイナがカンフー映画さながらの飛び蹴りが、ゼロの尻に直撃したのだ。あまりの痛みに尻を抑えてうずくまるゼロ。

ゼロ「な、ということだ…?」

ダイナ「あ、誰か笑ったらお尻を思い切り蹴っていいって言われたんで♪」

それを聞いて他の四人も絶句した。

ダイナ「んじゃ!また押してくれるなら来ますんで!」

ダイナはそう言うと、再びツクツクボウシの真似をしながら、何故かがに股歩きで去って行った。

ゼロ「…二度と押すか……………」

ゆっくり立ち上がって呟くゼロだった……

仲間割れの発生!! その2

グレンファイヤー「さあ! 残るこのスイッチを押そうぜ?」

先程の空気を払底するべく、グレンファイヤーが“絶対に押すな!”と書かれた白いスイッチを右手に持った。

ナイス「いやいや待ってくださいお願いですから待ってください」

ナイスが真っ先に早口で止めに入った。理由はもちろん、つい数時間前の悲(嬉)劇かナイスの脳裏に浮かんだからである。

ジャンボット「待つんだナイス。似てるだけで、実は宇宙のパワーで何かが装着されるスイッチかもしれないぞ?」

ジャンボットのでんでの外れな予想は、押すとナイスがどんな目に会うかわかりきっているからである。

ナイス「何ですかそれ? 宇宙キター! ってやるんですか!?!? かなりの絶対おかしいですよ!」

対するナイスは、完全にツツコミに回る羽目になった。

ゼロ「いや、ジャンボットの言う通りかもしれないぜ? 今度のヤツは白いからな」

ナイス「待ってくださいよ! 俺たちウルトラマンですよ!?!? 何で仮○ラ○ダーの話になるんですか!?!?」

グレンファイヤーは一刻も早くこのスイッチを封印しようとした直後、ナイスがそれを奪い取った。

ナイス「異議あり！実はランダムかも！？」

一転攻勢、ナイスの考えは既に全員が察していた。

グレンファイヤー「おい待て、謝るからそのスイッチを……」

ナイス「ポチッとな」

一歩早く、ナイスがスイッチを押した。

《デデーン グレンファイヤー O U T》

グレンファイヤー「オィィィ！！」

当然の結果に、グレンファイヤーは雄叫びを挙げた。

スパン！

ナイス「（大成功…ニヤリ）」

ご満悦のナイスは、思わず笑みを浮かべてしまった。

デデーン

ナイス「あ…」

『ナイス O U T』

スパン！

ナイス「ギャッ！」

ゼロ「自業自得だな」

ジャンボット「まったくだ…」

・
・
・

ミラーナイト「…ねえみんな」

グレンファイヤー「どうした？」

五人全員が席に座り、しばらくの沈黙が流れていたが、ミラーナイトが不意に呟いた。（ナイスはあの後四人にぼこぼこにされ、反省タイム中）

ミラーナイト「もしかすると、僕以外の引き出しの中身が変わっているんじゃない？」

ゼロ「おいおい、そんな訳ねえだろ？」

ミラーナイト「いや、僕達が外に行ってる間に中身を変えることくらい、十分可能なんじゃないかな？」

ジャンボット「それは私も一利ある」

ごもつともな意見に、ジャンボットも便乗する。

グレンファイヤー「おいおい焼き鳥もか？」

ジャンボット「焼き鳥じゃない！」

ミラーナイト「まあまあ。とにかく引き出しを開けてみればわかる話だよ」

ゼロ「へっ！いいぜ！開けてみようじゃねえか！」

ミラーナイトの言葉を聞き、ゼロが真っ先に引き出しを開けた。

しかし、ミラーナイトの言葉通り、引き出しのトラップはまだ終わっていないかった……

仲間割れの発生!! その2 (後書き)

その3に続きます!

仲間割れの発生!! その3

ガラッ!

ゼロ「出てきたア!」

ゼロが引き出しの中から出てきたモノを、机の上に叩きつけるようにして置いた。それは先程のスイッチとまったく同じの、“絶対に押すな!”と書かれた白いスイッチだった。

グレンファイヤー「なんかあったあ!」

続いてグレンファイヤーが引き出しから取り出したのは、これまで見たこともないリモコンだった。

ジャンボット「どれどれ…」

二人に続き、ジャンボットが引き出しを開ける。すると…

カラカラ…

ジャンボット「ブッ!…クククッWWW」

中から何の変哲もないボールペン一本が、勢いよく転がってジャンボットの視界に現れた。予想外の出来事に吹き出してしまったジャンボット。

デデーン

『ジャンボット O U T』

ゼロ「どうしたどうした?……フフフツ W W W」

何事かと見に行ったゼロも、巻き添えの形で笑ってしまった。

デデーン

『ゼロ O U T』

スパン! ドガシャ!

ミラーナイト「(僕のところは…さすがにないよね?)」

二人が罰を受けているのを尻目に、ミラーナイトはおそろおそろ引き出しを開けたが、予想通り何も入っていなかった。その結果にミラーナイトはちよっぴりがっかりしていた。

ナイス「(もう…開けてもいいよね?)」

最後にナイスが、引き出しを勢いよく開けた。
その時だった。

パパパパパン!!

突如としてナイスとその席が、破裂音と共に煙に包まれた。
その正体が、席に仕掛けられていた爆竹とわかったのは、それからすぐのことだった。

ナイス「ゲッホゴッホ!……何でこうなるの………?」

四人「プハハハハッ！WWW」

煙から姿を現した、ナイスのボンバーな格好に、四人は腹を抱えて死ぬほど笑った。

デデーン

『ゼロ ミラーナイト グレンファイヤー ジャンボット OUT』

スパン！×3ドガシャ！

・ ・ ・

ゼロ「…さあ、どうするどうする？キミならどうする？」

グレンファイヤー「知るか…どーせ誰かがOUTになるんだろう？」

五人はボドボドの状態（特にナイス）で、出てきた白いスイッチと、用途不明のリモコンについて議論していた。

ジャンボット「とにかく、まずは既にネタがわかっているこのスイッチからだ…」

ミラーナイト「ちょっと待って。コレを押すと間違いなく誰かが罰を受けることになるよ？」

ミラーナイトの考えはごもつともだったが、某脱獄囚並にイライラしているゼロ、グレンファイヤー、ジャンボットの三人には届いていない。そしてナイスはもう闇落ちしてしまいそうな雰囲気だった。

ゼロ「1人の犠牲が、時として誰かを救うこともあるぞ?」

ミラーナイト「それ、ウルトラマンの考えとしてどうなの…?」

ヤケクソ気味のゼロの意見に、ミラーナイトはあきれていた。

グレンファイヤー「もういいから押しちまうぜ?」

ミラーナイト「え、ちよっおま…」

ミラーナイトの阻止むなく、グレンファイヤーが白いスイッチを押した。

《デデーン グレンファイヤー OUT》

グレンファイヤー「また俺!?!」

ゼロ「クククッWWW」

ジャンボット「フッW」

デデーン

『ゼロ ジャンボット OUT』

ミラーナイト「あちゃ…」

スパン!×3ドガシャ!

三人は犠牲になったのだ……読者に笑いを届ける為の犠牲……その犠牲にな………

・

ミラーナイト「…じゃあ、次はこのリモコンだね」

ジャンボット「一体何だ？ここでリモコンとは…」

グレンファイヤー「とりあえず押してみようぜ？」

さっきの悲劇もモノともせず、再びグレンファイヤー自らがリモコンを押そうとした。

ゼロ「おい、またお前に火の粉が降り掛かるかもしれないぜ？」

グレンファイヤー「俺のこの手が真っ赤に燃えるウ！リモコン押せと輝き叫ぶウ！！」

どこぞの人物の台詞を言いながら、グレンファイヤーがリモコンの電源ボタンを押した。

すると、五人の目の前に設置されていたテレビが点いた。思わずテレビの画面を見る五人。

テレビに映し出されていたのは、夫婦の写真だった。

ナイス「ちょ、何で……」

写真に写っていた女性を見てナイスが真っ先に反応した。

ゼロ「どうした？」

ナイス「……俺の妻です……」

四人「な、なんだってー!？」

ナイスのおどとした言葉を聞き、四人が一斉に声を上げた。

ジャンボット「驚いたな…キミは既に結婚していたとはな……」

グレンファイヤー「人の良さそうな奥さんじゃねえか」

ミラーナイト「それで、隣にいるのがキミかい？」

各人がそれぞれの反応をする中、ミラーナイトはまだ顔が見えないスーツ姿のナイス（だと思われる）に注目した。

ナイス「あ、はい。……でもあんな写真あったっけ……?」

ナイスの疑問は、この後現実のモノになる。

やがて、夫の顔が明らかになった。其処には……

ナイス「は?……ちょっと何コレ？」

四人「あ……」

「出逢いは同じ職場でした!」と幸せ全開の文と共に現れた旦那方の顔は……

ナイス「何でザゴン星人なんだよ!?!」

何故かナイスの宿敵であるはずのザゴン星人だった。

ナイス「ちよつと!?!? 何親密そうな写真があるの!?!? しかも何路上でチューしてるの!?!?」

四人「ハッハハハッ!?!? W W W」

※既に笑いましたが最後までお楽しみください。

ナイス「ねえ! 何でホテルなんか行ってるの!?!? しかも手繋いでるし!?!?」

次々と流れる写真に、ナイスが怒り全開でツツコミをした。それを見た四人は、あまりにも適確なツツコミの為に爆笑していた。

ナイス「結婚式挙げてんじゃねえよ! 何幸せそうにケーキ入刀してるわけ!?!?」

更に繰り出される写真に、ナイスはどんどんマイナスエネルギーを増大させて行く。

ナイス「こ、子ども!?!? しかも三人!?!? 名前は『ブルブルザゴン』、『モモザゴン』、『タフザゴン』:っておめーの怪獣じゃねえかよ!?!?」

このままだと一体何匹ホーが生まれるかわからない。

ナイス「『これからも幸せに暮らしていきます』ってふざけんなよ

!!これ以上俺の心をボドボドにしないでよ!!」

四人「ハッハハWWWW」

デデーン

『ゼロ ミラーナイト グレンファイヤー ジャンボット OUT』

спан!×3ドガシャ!

ナイス「……」

ザゴン星人『ナイス、ねえ今どんな気持ち?』

最後にザゴン星人からの明らかに挑発のためのメッセージが添えられていた。

ナイス「後で覚えているよ……」

ザゴン星人『きっと怒っているザゴン。そんなお前に褒美をくれてやるザゴン!』

ナイス「…なんだよ…」

ザゴン星人『ナイス、3連発だザゴン!!』

デデーン

『ナイス OUT』

ナイス「何でこうなるの……………」

спан!×3

宣言通り3連発食らったナイス。その間にこう呟いた。

ナイス「ああ…………世界の悪意が見えるようだよ……………」

只今の時間、PM 1:30

(残り20時間半)

仲間割れの発生!! その3 (後書き)

グレンファイヤー「俺のウルトラアクトが真っ赤に燃えるウ！」

四人「ここで宣伝するなあ!!」

……次回をお楽しみください？

あつ！ ベリアルも何故か罰を受けた！！（前書き）

タイトル通り、陛下が登場します。

あっ！ ベリアルも何故か罰を受けた！！

ピンポーン

五人「ん？」

悲劇の連鎖で沈黙していた五人（特にナイス）の耳に、インターホンの音が聞こえてきた。

断る理由もないのでゼロが立ち上がって事務室の入り口のドアを開けた。

？「お昼ご飯を持ってきたわよ」

ゼロ「ぶっ！」

ゼロは危うく笑いそうになってしまった。何故なら昼ご飯を持ってきたのが、G U Y S J A P A N ベースの食堂で働いているはずの日ノ出サユリだったのだ。しかも、例によってサーペント星人のコスプレをしている。

ジャンボット「なんだ？その格好は……」

サーペント星人のことなど当然知らないジャンボットが真っ先に声を上げた。

サユリ「いかついウルトラマンに“この格好をしてくれ”って言われてね」

あくまでご機嫌なサユリである。

ナイス「いかついウルトラマンって……」

サユリ「黒くて、猫背で目付きが悪かったよ？」

五人「（ベリアル！？）」

あっさりと答えを絞りだした五人は、思わず立ち上がった。

サユリ「あ、ほらほら。ちゃんと座りなさい。すぐに配るから」

五人「はい……」

まるで五人の母のようになったサユリに、わりとすぐに座る五人。

それを見たサユリはあくまでニコニコしながら1人ずつご飯を配っていた。

・
・
・

サユリ「お残しは許しまへんで！」

五人「いただきます……」

サユリがニコニコしながら事務室を後にし、五人は食事を始めた。

グレンファイヤー「これが地球の食べ物か」

ミラーナイト「美味しそうだね」

ジャンボット「私は食べられないが……」

地球の食べ物を初めて見る三人は、各々の感想を口にした。

グレンファイヤー「仕方ねえだろ。お前ロボットだしな」

ジャンボット「う……」

因みにジャンボットに配られたご飯(?)は、エメラナ鉱石である。残る四人のご飯は、意外にも寿司だった。

ナイス「普通でしたね……」

ゼロ「ああ。てっきりツインテールの天ぷらとか、ゲスラの刺身とか、バードンの唐揚げかと思ったぜ……」

グレンファイヤー「それは旨いのか？」

ナイス「お察してください」

グレンファイヤー「わかった……」

とにかく、ご飯は普通だったので一安心した五人は、まず一口。

グレンファイヤー「うめえな」

ミラーナイト「確かに……」

ナイス「でしょ?地球のお寿司は最高なんですよ!」

ゼロ「親父から聞いたことがあるが、本当に旨いな！」

お寿司を食べて、四人は今までの（尻の）ダメージを回復し始めた。
だが…

ジャンボット「私にも食わせろオオオ！！」

自分だけ仲間外れな気分陥ったジャンボットが、いきなり四人の寿司を横取りした。そしてそれを口に当たる部分に入れようとしたが……

ジャンボット「くそッ！何故私の口は開かないんだッ！？何で私だけ味覚を味わえないんだ！？」

口が開かないジャンボットは、どうしても食べることができない。

グレンファイヤー「それはお前がロボットだからだろ？」

ジャンボット「無礼者にわかるか！？私がエメラナ鉱石を摂取するとき、どんなに虚しい気分になるのか！？」

グレンファイヤー「いやさつき見たし…お前は…」

ジャンボット「そうだ！私の構造状の理由により、私はエメラナ鉱石を尻の穴に入れなければならないんだ！！おかげで変な目で見られるんだ！！」

ゼロ「プブブ…」

ジャンボットが熱弁を振るう中、思わず笑ってしまったゼロ。

デデーン

『ゼロ OUT』

ジャンボット「ゼロ！今、私を笑ったな！？」

ゼロ「悪い悪い。……また尻を叩かれるのかよ……」

とはいえルールはルール。渋々ゼロは立ち上がって尻を突き出す。
同時に扉が開いた。

四人「あれ？ダークロプスじゃない…？」

ゼロ「？」

四人のリアクションを見て、本来なら背後にいるはずのダークロプスの方を見るゼロ。そこにいたのは……

グドン「グウルルル……」

ゼロ「？何でコイツが……」

何故か地底怪獣グドンが、うめき声を上げながらゼロの後ろに立っていた。

それを見たゼロは、嫌な予感を感じて冷や汗を流した。その直後…

グドン「グオオオン！！」

ビシッ！！

ゼロ「ぐわあああ！！」

グドンがムチになっている右手で、ゼロの尻を思い切りひっぱいたのだ。予想以上の痛みに悲鳴を上げてうつぶせに倒れるゼロ。

グドンはノックアウトしたゼロを見て、満足な表情を浮かべて出て行った。

グレンファイヤー「ぜ、ゼロ。大丈夫か？」

一呼吸置いて、グレンファイヤーが倒れて動かないゼロの身体を揺する。

ナイス「…ダメです。気絶してます…」

ジャンボット「“ダメージがグレート過ぎて、動けない！” って言うことか？」

ミラーナイト「いや、まだゲキレツダメージなんじゃないかい？」

ジャンボット「それもそうだな…」

ナイス「いや、勝手に別作品のゲームの話しをしないでください…」

ゼロが動かないというのにゲームの話しになった二人に、ナイスが冷静にツツコミを入れた。

ナイス「ていうか何でお仕置き人がダークロプスじゃなかったんだ

ろう……」

三人「さあ？」

？「急用だからだ！」

四人「そ、その声は！？」

四人が声の方向を見ると……

ベリアル「／＼ベリアリ／＼」

四人「は？」

いつのまにか事務室に入ってきたカイザーベリアルが、アイアロンとダークゴーネを伴ってサン〇ル〇ンみたいなポーズをとっていた。

四人は目の前にベリアルがいるというのに、ベリアル自身が上げた謎の奇声に沈黙してしまった。

ベリアル「……おい！何故俺様の渾身のギャグがスベッたんだ！？」

アイアロン「へ、陛下！私にも理由が……」

ダークゴーネ「きっとまだ笑う雰囲気じゃなかったんですよ」

ベリアル「そーなのかー？」

ダークゴーネ「そーですよー」

四人「…」

三人のコントのようなやり取りに、暫し沈黙していた四人だったが、一呼吸置いて…

四人「ベリアル!?!」

ベリアル「やっと俺様に気付いたか……あのまま黙ってたらマミってやろうと思ってたぞ!」

アイアロン「ぶるあ! お前達、気付くのが遅いわあ!」

ダークゴーネ「さあさあ。皆さんが気付いてくれたところですし、陛下、要件を…」

ベリアルとアイアロンが半分キレる中、ダークゴーネは低姿勢な物腰でベリアルに提案した。

ベリアル「それもそうだな……よし! 今回は俺様の広い心に免じて許してやる。先ずは何故ダークロプスがいなくなったのかについてだ!」

四人「ウンウン…」

ベリアル「現在ダークロプスは、予備機も含め全てが俺様の嫁の手伝いに駆りだされてしまい、ストックがない!!」

四人「よ、嫁エエエ!!?!」

四人が驚いたのは、ベリアルに嫁がいることだった。

ベリアル「そうだ！俺様は貴様達と違い、嫁も子どももいるんだ！
！」

ナイス「あ、僕にも嫁と子どもはいますよ？」

ミラーナイト「信じられない…」

グレンファイヤー「子どもまでいるとはな…」

ジャンボット「あの身なりの何処が良いというんだ…？？」

ナイス以外は、何でベリアルごときに…と言った雰囲気になった。

ナイス「あのゝ。因みにお手伝いというのは？」

ベリアル「家事全般、子どもの送り迎え、宿題の手伝い、自宅警備、
といった感じだ。更に、レギオノイドまで庭の耕作や警備に使い始
めたからな！」

アイアロン「陛下、奥様がきつと見てます…」

ベリアル「はっ！！」

四人はこの言葉から、“ベリアルの子は恐妻家である”という結果
を導きだした。

ベリアル「…というわけだ！これから暫くの間、仕置き人は俺様の
しもべの怪獣が代役となる！せいぜい絶望の恐怖を味わうがいい…
…フーハッハッハ！！」

高笑いをあげるベリアル。その時だった。

デデーン

全員「えっ……?」

『ベリアル O U T』

何故かO U Tの音声が鳴り、その場にいた全員が固まった。

ベリアル「な、何故だ!? 俺様は参加者じゃないぞ! チーフプロデューサーだぞ!？」

アイアロン「陛下、これもルールです。我慢してください」

ダークゴーネ「痛みは一瞬か、ちよつとくすぐったい程度ですよ?」

ベリアル「やめろオオオ!! 俺様はF F Rする気はない!」

暴れるベリアルをアイアロンが押さえつけ、ダークゴーネが右手から光のムチを出す。それにしてもアイアロン、かなりの力である。

ダークゴーネ「そおい!」

ビシッ!!

ベリアル「ギヤアア!」

四人「ベリアル……ざまあ W W W」

ベリアルのお仕置き光景を見た四人は、思わず指を差して笑ってしまった。

デデーン

四人「あ……」

『ミラーナイト グレンファイヤー ジャンボット ナイス
O U
T』

それぞれのお仕置き怪獣は、ミラーナイトはゴルザ、グレンファイヤーにはグドン、ジャンボットにはレッドキングになったが、ナイス“だけ”は……

ナイス「何で僕だけゼットン!？」

ナイスの前に現れたのは紛れもない、宇宙恐竜ゼットンだった。

四人「ギィヤアアアアッ!!!!」

刹那、事務室はメチャクチャになり、美術スタッフのペダン星人やらサロメ星人が慌てて修復作業を始めたのは言うまでもない。

只今の時間

P・M・2・0・0

(残り二十時間)

※セットを修復した為、30分近くがムダになりました。

あっ！ ベリアルも何故か罰を受けた！！（後書き）

何故ベリアルが罰を受けたか……それは総監督のエメラナ姫って奴の仕業なんだ……

ベリアル「なんだって！それは本当かい！？」

仮部屋狂騒曲

※これは、めちゃくちゃになったセットを修復している間に起こった出来事である！！

ゼロ「驚いたな。セットが壊れるなんて…」

ミラーナイト「どうやら“笑った奴をボコボコにしてもいい”と聞いて、怪獣達がついつい興奮してしまったみたいだね……」

グレンファイヤー「そりゃあそうだろう。積年の恨みが溜まっているんだからな」

ナイス「何でゼットンが……」

ジャンボット「で、私たちはこの急遽用意された部屋へと案内された訳だ」

現在五人がいる部屋は、真っ白でテレビ一台と長い机くらいしかない、楽屋のような部屋だ。

因みに先ほどまで気絶していたゼロは、この仮セットに案内された直後に目を覚まし、

四人から事情を聞いて現在に至る。

グレンファイヤー「こんな部屋あったのか。まさに“見知らぬ天井”だな」

ゼロ「おい、何か見えるぞ？」

ゼロが指差す先……其処にあったのは、

ゼロ「ふ、フリートーク数十分!?」

白いカンペに殴り書きされた文章に、ゼロは思わず声に出して読んでしまった。

グレンファイヤー「おいおい! そんなに長く喋るテーマはねえぞ!」

早くもやりたくない的な雰囲気に入った直後だった。

ミラーナイト「それにしても、どうだった? 銀○とス○ダンのコラボは?」

ジャンボット「私は面白かったな」

ナイス「あ、同じく!」

早くもフリートークを開始した三人。完全にプライベートな会話である。

ゼロ「おいちよっと待て! 何別作品の話普通にしてるんだ!? これ完全に素のトークだよな!」

珍しくゼロがツツコミにまわった。

グレンファイヤー「そうだそうだ!……俺にもまぜてくれよ?」

ゼロ「お前もかよ!?!」

ジャンボット「まあカッコするなゼロ。そういえばゼロ、キミはこの間新たにアフレコしたらしいが……どの場面だ?」

グレンファイヤー「やっぱアレだろ? ジャンキラーとダ○ル○ーラ
○ザーごっこでも——」

ゼロ「それ以上は止めろっ!!」

ミラーナイト「そうだ。“ブラックホールが吹き荒れるぜッ!!”
だっけ? アレ本当にゼロのアドリブなのかい?」

ナイス「ま、マジっすか!?! アレ個人的にないだろうって思ったんですけど……」

ゼロ「…おい。コレおかしくないか? 何俺が突然ターゲットになっ
てるわけ?」

何故かはわからないが、四人はゼロを弄り始めた。狙いは大成功で、
ゼロは赤っ恥映像を晒された芸能人みたいに赤面して立ち尽くして
いる。

グレンファイヤー「俺はよー。俺のビッグバンはもう誰にも止め
られないぜッ!!”も何だよと思ったんだぜ?」

ジャンボット「奇遇だな。私もだ」

ゼロ「お、おまいら? いい加減にしないと——」

ナイス「ゼロさんってアレでしょ？厨二びよ―」

ゼロ「やめろおおお！！これ以上はいい！俺はドMになる気はない！！」

四人「アッハッハハハ！！wwww」

瞬間湯沸し器のようになったゼロの叫びに、四人は腹を抱えて笑ってしまった。

デデーン

『ミラーナイト グレンファイヤー ジャンボット ナイス OU
T』

いくら仮セットとはいえゲームは続行中。というわけで四人は仲良
く罰を受ける羽目になったのだが…………

ナイス「あるえー！？」

ナイスが驚いたのは他でもない。三人がベムラーだのエレキングだ
のベムスターだのといった比較的普通な怪獣が来たのに、何故か自
分だけまたオーバーキルな怪獣のタイラントだったからだ。

タイラント「グエエエツ！！」

ナイス「何でこうなるのおおお！？」

ナイスの悲鳴が狭い仮セット中に響き渡った。そのせいで他の怪獣
達をキレさせてしまい、ナイスだけおまけをくらったのは、また別

の話。

・
・
・

メビウス「ういゝす。W A W A W A 忘れ物ゝっと」

ズタボロの五人（約一名、精神的な意味で）の空気を明らかに読んでいないメビウスが入ってきた。

ゼロ「何だろう…？ 光が点いたり消えたりしてる…」

そんな精神的ダメージがかかったゼロは、精神崩壊してしまっていた。

ミラーナイト「あ…ゼロは気にしないで」

メビウス「わかっていますよ。どうですか？ フリートークは」

グレンファイヤー「まあおかげさまでゼロがああなったが…順調っっちゃ順調だぜ？」

ナイス「もうイヤだもうイヤだもうイヤだもう…」

ジャンボット「後、仮セットまでメチャクチャなの気にしないでくれ」

ジャンボットの言う通り、仮セットは机がボロボロになっており、五人は唯一無事だった椅子に座っている。

メビウス「大丈夫です。後できっちり怪獣の皆さんには責任を取っ

てもらいますので……」

メビウスは黒い笑みを浮かべながら語り、カ〇ーユ状態のゼロ以外の背筋が凍った。

メビウス「……というわけで！セットが修復するまでの間、皆さんには暇を解消してもらうべく、テレビでも見ていてください！」

メビウスが、仮セット内の奥に置かれているテレビを指差した。

グレンファイヤー「お、見てもいいのか？」

メビウス「もちろんさ」

退屈が頂点に達していたグレンファイヤーにとっては、嬉しい知らせだった。

ジャンボット「ちょっと待て。何か仕掛けがあるんじゃないか？」

ナイス「きつと笑いのトラップがあるんだってヴぁ！」

ミラーナイト「そして僕たちが罰を受ける……と」

しかしこれまでの経験からか、そう簡単にはのらない三人。

メビウス「嫌だなく皆さん！……では証拠を見せてあげますよ？」

そう言うときメビウスは、懐から取り出したリモコンで、テレビの電源を点けた。テレビに表示された映像……それはただの報道番組だった。

それを見た四人はホッと一安心した。メビウスは「それじゃお楽しみください!」と満面の笑みでセットから出ていった。

ナイス「な〜んだ。またヘンテコな映像が流れるかと思いましたよ」

ジャンボット「まったくだ」

グレンファイヤー「さあて、これで暇を潰すか?」

リラックススムードに入った三人だったが、ミラーナイトだけはまだ警戒体制を崩していなかった。

ミラーナイト「待って。これから始まる番組が……」

三人「?」

四人がテレビの画面に注目した直後、何処かの造生地が映り、爆発と火柱が上がってその中から五人の人間のシルエットが浮かび上がった。

四人「????」

ベタな特撮番組のヒーロー登場シーンに、四人は目を丸くした。しかし、そのヒーローの姿に、四人は絶句することになる。

『ZAPレッド!』

『ZAPブルー!』

『ZAPイエロー!』

『ZAPグリーン!』

『ZAPピンク!』

『開拓戦隊!ZAPレンジャー!!!』

ドドーンと背景で大爆発が起こり、ヒーロー登場……ていうか何故かあのスペースシップペンドラゴンのクルーがヒーローの衣装に身を包んでいた……

グレンファイヤー「なあにこれえ？」

ゼロ「どうしてアイツ等が!？」

いつの間にか回復していたゼロが、テレビを見るなり叫んだ。

ジャンボット「知ってるのか？」

ゼロ「忘れもしない!ペンドラゴンのクルーじゃねえか!!」

ミラーナイト「はあ……」

変な空気に包まれた五人を余所に、画面の中の五人は戦闘を開始していた。

因みに、レッドがレイ、ブルーがヒュウガ、イエローがクマノ、グリーンがオキ、ピンクがハルナだった。

レイ『みんな！行くぞ！！』

四人『オー！』

ZAPレンジャーは敵に向かって走っていく。敵は無数ペダン星人。がんばればくらのZAPレンジャー！！

流れるような格闘術で、ペダン兵を一層するZAPレンジャー。すると今回の怪人とも言えるザラブ星人が現れた。

ザラブ星人『おのれZAPレンジャーめ！これでもくらえ！！』

ザラブ星人は両手から光線を発射して攻撃してきた！あぶない！まけるなZAPレンジャー！！

レイ『くっ……！こうなったら……』

辛うじて立ち上がったZAPレンジャー。そしてZAPレッドことレイが叫んだ。

レイ『ハルナ！ZAPハリケーンだ！！』

ハルナ『オッケー！トイヤっ！』

指示を受けてZAPピンクが絶対いらないジャンプをして置いたのはアメフトボールだった。

そして五人が並び立ち、レイが再び叫んだ。

レイ『ZAPハリケーン！イヤホン！！』

五人「ぷっ！w」

※既に笑いましたが最後までお楽しみください。

レイ『アタック！』

合図と共に走りだすZAPレンジャー。ハルナがまずボールを手にした。

ハルナ『いいわね？行くわよ！クマさん！！』

ハルナはクマノに向かってジャンプしてボールを投げてパスした。

説明しよう！ZAPハリケーンとは、ZAPレンジャー五人の力を合わせて放つ、最終最強究極鬼畜な必殺技なのだッ！！

クマノ『まかせろ！』

受け取ったクマノはボールを抱えながら、行く手を阻むペダン兵をタックルで蹴散らす。

クマノ『ほら行くぞ！オキ！』

クマノは右にいたオキに向かってボールを投げる。

オキ『おっとっと！』

何とか受け取ったオキは、ジグザグに走りながらペダン兵達をかわ

す。

オキ『行きますよ？ボス！』

オキは前にいたボスことヒュウガに向かってボールを投げる。

ヒュウガ『よし！』

受け取ったヒュウガは、何故かボールを再び地面に置いた。

ヒュウガ『レイ！クラウチングトライだ！！』

レイ『オッケー！！』

ヒュウガは奥に控えていたレイに指示を出し、レイは地面に置かれているボールに向かって全力疾走。そしてたどり着くと……

レイ『超振動波エンドボールッ！！』

こう叫んで、ボールをザラブ星人に向かって思い切り蹴った。

ボールは猛スピードでザラブ星人の下へ向かって行くと、途中でイヤホンに変形した。

ザラブ星人『おお。ちょうど耳につけるイヤホンが無くなっていったんだ。使わせて貰おう』

ザラブ星人、戦闘を無視して両耳にイヤホンをつける。

しかし……

ザラブ星人『!…何だ!? 急に雑音が…ギヤアア!!!』

突然イヤホンからものすごい雑音が響き、ザラブ星人は鼓膜が破れて大爆発を起こしてしまった…

レイ『やったぜ!』

四人『オーッ!』

ZAPレンジャーは勝利のポーズ。

ザラブ星人『踏み潰してやるッ!』

と思いきや、ザラブ星人が巨大化した。急いで下がる我らのZAPレンジャー。

レイ『しつこいやツだ!』

レイはバトルナイザーみたいな機械で何かを呼び出した。

『発進! ペンドラゴンッ!!』

熱い認識音声が鳴ると、上空から空間を裂け、ペンドラゴンが現れた。

ZAPレンジャーはペンドラゴンに向かってジャンプすると、吸い込まれるようにして飛び乗った。

『ゴースタードラゴンッ!!』

更に後続くように、ゴースタードラゴンが飛来した。

ZAPレンジャー『開拓合体!!』

ZAPレンジャーが叫ぶと、二隻の船が変形を始め、最後には合体した。

ZAPレンジャー『完成!メカゴモラ!!』

ゼロ「敵のロボットじゃねえか!!」

ゼロがテレビに向かってツツコミを入れた。

一方、巨大戦では終始メカゴモラが圧倒、トドメの一撃になっていた。

ZAPレンジャー『必殺!メガ超振動波!!』

必殺技が決まり、ザラブ星人は今度こそ爆散。EDが流れ始めた頃……

デデーン

『全員 OUT』

ナイス「もうイヤだ…」

尚、ナイスの仕置き人はこれまたオーバーキルな怪獣、キングジョーブラックだったことを付け加えておく。

これは、セツトが修復するまでのお話。

仮部屋狂騒曲（後書き）

どうも、この間親に「電子辞書の電池無い？」って聞いて、「普通の辞書を使いなさいよ」と言われるまで、今まで使っていた英語辞典の存在を忘れて「あたしって、ホントバカ」な気分になった僕です。

それはともかく、最近テスト勉強で忙しく、今まで更新していませんでした。（↑いつも遅いクセに）

そして今月末の推薦入試が刻一刻と近づいている為、当分の間は更新がほぼ止まると思いますが、試験が終わったらウルトラマンジャックみたいに帰って来ますので、どうか気長にお待ちください？

開催！大運動会 その1（前書き）

ベリアル「よし！アマ○ミのメインキャラを全部攻略した！！因みに俺様のイチオシは七咲だ！！」

アイアロン「陛下？何を言っているんですか……おいダークゴーネ、ちょっと来て……」

ダークゴーネ「梨穂子はかわいいなあ！！！」

アイアロン「（ダメだこいつら……早く何とかしないと……）」

※こんな前書きですみませんorz

開催！大運動会 その1

※セットの修復は無事終了しました。

グレンファイヤー「やれやれ…やっと直ったな」

ジャンボット「あのまま仮セットでやっていたら……」

ミラーナイト「いずれにせよ身体は保たないだろうけど……」

ナイス「でしょうね……」

ゼロ「んで、きれいさっぱりになったわけだが」

ゼロの言う通り、先ほどまでメチャクチャだったセットは完全に修復していた。五人はそれぞれ自分たちの席に座り、談笑していた。

グレンファイヤー「なあ。まど○☆マ○カのゲームって買うか？」

ジャンボット「私はそのつもりだが……」

ミラーナイト「僕的にはE○V Sのゲームが欲しいね。ウイ○グ○ロ使いたいし」

ナイス「いいっすねえ」

ゼロ「俺はダ○ルオー○イザーを使うぜ！」

会話の内容は、相変わらずフリートークだったが……

『♪ピンポンパンポン』

五人「？」

そんな五人のいる事務室に、チャイムの音が響き渡った。
思わず天井を見上げる五人。

『ええゝまもなく恒例行事の一つであるゝ、大運動会が始まりまゝす。参加者の皆さまはゝ、会場に集合してくださいさゝい』

変な抑揚でアナウンスが流れた。だが数々の罨を経験し、その度に尻を痛めた今の五人には、この程度では笑わなくなった。

グレンファイヤー「大運動会？」

ナイス「お笑いタレント達がやるアレみたいな物ですかね？」

ジャンボット「だろうな」

ミラーナイト「僕達はどうするのかな？」

ゼロ「まだメビウスのヤツは来てないから……暫く待機してるか？」

ガチャ

全く行く気がない五人。そんな時に事務室の扉が開いた。

？「やあ諸君！まもなく大運動会が始まるぞ！」

入って来たのは見たこともない人相の宇宙人だった。

五人「誰だお前？」

五人が一斉に口を開いた。

謎の宇宙人「俺を知らない！？……フッ！まあ仕方ない。先代のアイツはたまたまブサイクなヤツだったからな。このI☆KE☆MENの俺を知らないのも無理はないか……よし教えてやろう！このI☆KE☆MENの宇宙人の名前を！」

明らかに気取ったポーズを取りながら五人に近づく宇宙人。五人は“何このウザいヤツ”と思っていた。

「そう！俺様こそ！次の映画の真の主演、バット星人だ」

[illegible]

五人は立ち上がって叫んだ。

ゼロ「待て待て！ バット星人と言えばなあ！」

グレンファイヤー「ずんぐりむつくりな体型でブサイクで！」

ミラーナイト「ゼットン（笑）の飼育が得意で！」

ナイス「ナイフ刺されただけで倒れちゃう！」

ジャンボット「最終回到相応しくない宇宙人じゃないか!？」

バット星人「……色々ヒドイこと言ってないか？」

五人「絶対お前バット星人じゃないだろ!? 同姓同名の別宇宙人だろ!？」

五人はまだまだ驚愕の姿勢を崩さなかった。

バット星人「落ち着けえ! 今説明するから!“詳しく”説明するから!」

・
・
・

暫くして、ようやく落ち着いたところで、バット星人が口を開いた。

バット星人「実はだな、地球に来た別個体がいただろ？」

五人「うんうん…」

バット星人「アイツはたまたまブサイクな個体だったのだよ! アツハハハ! そう! この俺様の姿型こそ、バット星人のノーマルな人相なのだよ!」

五人「嘘だっ!」

バット星人「嘘じゃない! これからは俺様の時代だ!! 我が世の春が来たアアア!!」

高笑いをするバット星人を見て、五人は益々頭がパニックに陥った。

メビウス「バット星人さ〜ん？」

バット星人「ハハハ…ハ？」

そんな時、バット星人の背後に、いつの間にかメビウスが黒い笑みを浮かべながら立っていた。

バット星人「あのーメビウス？なんでそんな怖い顔をしているんだい？」

メビウス「いつまでも調子に乗っていると、アナタの身体にゼルダガスをかけますよ？」

バット星人「…ごめんなさ〜い！！！」

メビウスの一言に、バット星人はたちまち退散した。

グレンファイヤー「ゼルダガスって何だ？」

メビウス「目薬一滴で半径3キロが吹き飛ぶガスですけど？」

五人「（。D。）」

・
・
・

メビウス「さあ皆さん！こちらが大運動会の会場です！」

いつも通りの爽やかな笑顔でメビウスはガイドをしているが、五人は無口にならざるを得ない雰囲気だった。

会場には既にウルトラ戦士や何故か怪獣や宇宙人が集合していた。

ゼロ「なんで怪獣達までいるんだ？」

メビウス「この時は皆さんも戦いを忘れて、運動会を楽しむんです！」

ジャンボット「毎日こんな感じなら平和だろうな…」

メビウス「ほらほら！まもなく開会式が始まりますので、列に並んでください！」

メビウスに言われるままに、五人はそれぞれ列に並んだ。

五人の目の前にはウルトラマンキングら代表者が台の上に立っていた。

『これから、第二十万回大運動会開会式を行います』

五人「（やり過ぎだろ…）」

五人が思うのはごもつともだが、周囲の参加者達はまったく気にせず涼しい顔をしている。

『まずは選手宣誓。参加者代表ウルトラマンさん』

ウルトラマン「はい」

宣誓の言葉は初代ウルトラマンだ。ウルトラマンは台に上がると、

マイクを手を取った。

ウルトラマン「これから！うんどうかいを、はじめます！！」

参加者達「はじめます！！」

五人「ブクククWWW」

ウルトラマンと参加者達の思い切りの幼児のような宣誓に、五人は吹き出してしまった。

デデーン

『全員 OUT』

五人の罰を受け持つのは……

グレンファイヤー「あなたはだあれ？」

五人とも、この役割がある意味一番似合っているフック星人がムチを手に五人現れた。

スパン！×5

五人「イデッ！」

『続きまして、ウルトラマンキングの話しです』

五人の悲鳴など聞こえていないように、アナウンスが進行を進めた。キングは立ち上がるとマイクを手に取り、今から話しようとした

瞬間だった。

『緊急事態！この中にキングの大切な青いハンカチを盗んだ者がいる！犯人は今すぐ手をあげろ！！』

アナウンスが流れた瞬間、辺りはざわざわし始めた。一応念のため、自分たちの懷をまさぐる五人。

ゼロ「あったか？」

グレンファイヤー「ある訳ないだろ」

ジャンボット「それもそうだな」

ミラーナイト「うーん。何か嫌な予感がするんだけど……」

ナイス「……………」

ゼロ「ん？どうした？ナイス」

ゼロが硬直したままのナイスの肩を叩く。するとナイスはゆっくり振り向き……

ナイス「…なんかあったんですけど……」

ナイスの手には、青いハンカチが……

四人「！！（。＼＼。＃）」

キング「それは…私の物じゃないか！？」

運悪く、キングに見つかってしまった。

ナイス「ち、違うんですっ！気がついたら持ってたんですっ！！」

『犯人には重罪を！繰り返す！犯人には重罪を！』

アナウンスもすごいことを言っていたので、必死に弁明するナイス。
しかし台の上まで連行されてしまった。

キング「キミがやったのか？」

ナイス「違いますから！！」

四人「プププッWWW」

ナイスのリアクション芸人のような弁明を見て、四人は笑ってしまった。

デデーン

『ゼロ ミラーナイト グレンファイヤー ジャンボット OUT』

スパン！×4

？「旦那あ！コイツの処分は任せてください」

キング「あ、いいの？」

不意に台の上に上がってきたのは、何故かレイブラット星人だった。

声も何処かの格闘家に似ている。

ゼロ「げ！？なんでアイツが……」

グレンファイヤー「何だ？」

ゼロ「かつて宇宙の全てを支配したと言われる、レイブラット星人だ……！」

ミラーナイト「なんだって!?!」

ゼロ「アイツは既に死んでいるはずだ……何故だ……」

それは……この小説がギャグだからである。

レイブラット星人「旦那あ、いいだろ？」

キング「……じゃあ頼むよ」

ナイス「ええええ……」

ナイスは絶句した。キングよりも明らかに怖そうな宇宙人だからだ。

レイブラット星人「お前な、たるんでいるんじゃないか？」

開始早々レイブラット星人がナイスに掴み掛かった。

ナイス「いや、そ、そそその」

ナイスは恐怖感丸出しになっていた。

それを見た四人に、笑いの衝動が込み上げて来た。

レイブラット星人「なあ、ちょっと歯あ食い縛れよ？」

ナイス「え…？」

突然、レイブラット星人が拳を構えた。

何が起きるのか想像が付き、顔色が青ざめてきたナイス。

レイブラット星人「お前を鍛え直すから、歯あ食い縛れ」

ナイス「ま、待ってくださいよー！！」

四人「クックククWWW」

今にも殴りそうな様子を見て、結局笑いだす四人。

デデーン

『ゼロ ミラーナイト グレンファイヤー ジャンボット OUT』

スパン！×4

レイブラット星人「よし行くぞ！歯あ食い縛れ！」

ナイス「ウソ！？ま、待ってくださいまだ心の準備が……」

レイブラット星人「行くぞ！」

ナイスの弁明を途中で断ち切り、殴る準備に掛かったレイブラット

星人。

ナイス「ヒイイイ!!」

バシン!!

会場に、レイブラット星人の強烈なビントの音が響き渡った……
その衝撃は、ナイスが仰向けに倒れる程のモノだった。

四人「プギャーm9（^Д^）」

同類が悲劇に会ったにも関わらず、最早お約束とばかりに指を差して笑う四人であった……

デデーン

『ゼロ ミラーナイト グレンファイヤー ジャンボット O U T』

スパン!×4

こうして、まだ開会式だと言うのに、五人は何度も何度も痛い目に会ったのだった……

開催！大運動会 その1（後書き）

「バット星人を出してくれ〜」と友人に頼まれたので、無理矢理ねじ込みました。…ネジ〇ジアが出そうなくらいに？

因みに懲りもせず更新していますが、テストは終わってまだ鬼門の英語と古典が返ってきていません……多分＼（＾〇＾）／なことになるでしょう……

それではまた次回お会いしましょう

開催！大運動会 その2（前書き）

ベリアル「まど○ギの映画がやると聞いたんだが本当か？」

ダークゴーネ「本当みたいですネ…」

アイアロン「陛下…前書きでサブカルチャーの話しは…」

ベリアル「いいのか？お前が密かにラブ○ラスをやっていて凜子の
彼氏だと…」

アイアロン「やめてくださいっ!!」

※こんな前書きで（ry

開催！大運動会 その2

実況「何が始まるんです？」

解説者「大運動会だ…」

観客「ざわざわ…」

大運動会会場、実況解説の席があり、その向かい側にゼロ達五人が座る“特等席”、そして観客席がある。さあ、注目の実況解説は……

ゼアス「さあまもなく始まります大運動会！会場はかなり盛り上がっております！実況はわたくしウルトラマンゼアス！解説は……」

マグマ星人「どうも、マグマ星人でえゝすw w w」

ナイス「ゼアスに○島エ……」

二人の姿を見てから、ナイスは一人ぶつぶつ言い始めた。それもそのはず、二人とナイスは知り合いなのである。

グレンファイヤー「ナイスのヤツ…さっきからあんな感じだぜ？」

ミラーナイト「何か恨みでもあるのかな？かな？」

ジャンボット「それにしても…何故また私達だけ“特等席”なのだ？」

ジャンボットの言う通り、五人が座っている席は、会場や選手の様

子が非常によく見える通称“特等席”だった。
何故此処に五人が座っているのかは読者諸兄にはわかっているだろう。

ゼロ「まあまあ、笑わなければどうということはないだろう。」

ミラーナイト「ゼロ、それは今までの出来事にでも言えることなんじゃないのかな？」

ゼロ「あ…」

墓穴を掘ったゼロを余所に、いよいよ大運動会が始まろうとしていた。

ゼアス「さあさあ！まずはFIRSTステージをご紹介しますでしょう！」

グレンファイヤー「FIRSTって…」

ミラーナイト「SECOND以降もあるってこと…？」

ナイス「何であそこにいるんだ何であそこにいるんだ何であそこにいるんだ………」

独り言が続くナイスを除いた四人は、大運動会の形式に絶句した。

ゼアス「FIRSTステージはこちら！一見ただのプールのようですが……中身はサザーンのヘドロと、ガンザの泡、レイロンスのヨダレ……等々がたっぷり詰まったキングカップのプールです！！」

会場のと真ん中にあるプールの水の色は、もしもあの中に入っていたら問答無用でレイキュラが起動しそうなくらい、スゴイ色とスゴイニオイだった。

ちなみにプールの元になったキングカッパはどうなったかという
と……………お察しください。

ゼアス「ルールを説明しましょう！事前に二人一組になった参加者は、一人が中に飛び込んで、プールの底にあるボールを取って来なければなりません！！その間もう一人の方は、パートナーが限界になったら交代してあげることが出来ます！制限時間は1分です！！」

マグマ星人「ちなみに失敗するとだねーwww教えねえwww」

ゼアス「では、参加者一同の入場です！！」

ゼアスの声が号令になり、参加者一同が行進してきた。

ゼロ「んなっ！」

参加者一同の一人を見たゼロが、思わず声を上げた。

グレンファイヤー「どうした？」

ゼロ「親父が……」

そう、ゼロの親父であるウルトラセブンがウルトラマンとパートナーを組んでいたのだ。しかも、参加者全員なぜか女性用の競泳水着を着ていた。

ジャンボット「これくらいではもう笑わん……」

ゼロ「親父ィ…何でだ…?」

ミラーナイト「まあまあ、後で一人用のポットで逃げ出そうした時に問い詰めればいいんじゃないかな？」

ゼロ「ナジェダー!!」

ナイス「ああ、あいつらはいいいよなあ…」

叫びで滑舌が悪くなるゼロと、地獄に堕ち始めるナイス。

ゼアス「さあ！スタートです!!」

ゼアスの宣言と共に、大きな横断幕が現れた。其処に書かれていたのは……

「FIRSTステージ…ボールと一緒にシチョーリツも取るんだなあってユリアンはユリアンは宣言してみるんですのっ!!」

五人「ハッハハWWW!」

完全に斜めからの攻撃に、五人は笑ってしまった。

こうなったのは腐女子のユリアンってヤツの仕業なんだ…

デデーン

『全員 OUT』

スパン!×5

こうして、FIRSTステージが開幕した……

次回へ続くっ!!

開催！大運動会 その2（後書き）

どうもお久しぶりです。

あ、一応大学に受かったことをご報告させていただきます。

これで更新速度も速く……なるとでも思っていたのか！？（ブ〇リ
ー風に）

というわけで、相変わらず不定期更新になるかと思いますが、どうかよろしく願いますm（　）m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4372u/>

絶対に笑ってはいけない宇宙警備隊24時

2011年11月17日18時58分発行